

轍

—わだち—

未来へ繋ぐ木沢の軌跡

中越大震災から10年／長岡市川口木沢・峠地区震災復興記念誌



フレンドシップ木沢

轍

—わだち—

未来へ繋ぐ木沢の軌跡

中越大震災から10年／長岡市川口木沢・峠地区震災復興記念誌





目次

震災からの復興活動記録 …… 3

- フレンドシップ木沢の活動記録「前へ」 …… 4
- 学生のパワーが木沢を元気に …… 13
- 復興へ向かって2つのリスタート …… 16
- ヤマの匠プロジェクト …… 18
- 集落の活動記録 …… 20

一人ひとりの復興と未来へのメッセージ …… 23

- 木沢 …… 24
- 峠 …… 44
- 木沢を離れた方 …… 46

復興車座談議 …… 49

十年後の木沢へ …… 55

- 木沢に関する新聞記事 …… 66
- 十年の歩み（年表） …… 73

あとがき …… 79



震災からの復興

活動記録

木沢復興7か条

1. 木沢にしかできないことにこだわる
2. 木沢らしさを楽しむ
3. 木沢らしさを伝える
4. みんなでやる
5. 収入を得られるようにする
6. よその人や、何度も来てくれる人を
温かい気持ちで迎える
7. 適切な情報を発信する





二子山遊歩道の自力復旧

二子山（標高 433.5m）は集落の背後にそびえる川口地域で一番高い山。二つの峰を持つことから名付けられた二子山にある遊歩道を、早く直し活用したいと2年間を掛け自力復旧した他、階段などの整備も行いました。地震による亀裂などで分断された道をスコップで直したり、杉丸太を架けたりと、ボランティアの力も借りながら復旧。また、階段は材料の運び上げから手間と時間を掛け整備しました。

フレンドシップ木沢の活動記録「前へ」



山菜ふれ愛ツアー

木沢の春といえば旬の山菜。この宝ものを活用した体験交流メニューとして毎年行っています。雪の消えた地面からのびる山菜を、自分で採り、調理し、食べる。もちろん木沢の名人が案内とお手伝い。木沢で春と山菜を満喫してもらっています。





木沢流

木沢流防災体験塾
フレンドシップ木沢

防災体験塾

新潟県中越大地震で大きな被害を受けた木沢だからこそ出来る防災体験キャンプ。道路が寸断され、怪我人も発生している状況で何が出来るのか。地震を体験した木沢のみならず参加者が一緒に考え、答えを見つけ、行動します。

生きた知恵と役立つ知識を学んでもらいたいと始めました。

最初はキッズ・トライ・キャンプとして始まり、現在はより防災面についてのメニューを加えて開催しています。



雪かき道場

冬3m以上の積雪となる木沢。雪下ろしの作業は昔から危険を伴う重労働でした。一方中山間地域では過疎化・高齢化が進み、雪下ろし作業中の高齢者の事故も多く、また、作業をすること自体困難な状況も見られます。

雪かき道場では、除雪ボランティアの育成を目指し雪かき技術の指導や命綱による安全対策の実技など初級・中級・上級の各コースを設け毎年2月頃に実施しています。なお、NPO法人中越防災フロンティアと共催で実施しています。



フレンドシップ木沢の活動記録「前へ」



NPO法人多世代交流館 になニーナ との交流

平成18年2月に開催された中越復興交流会
議で長岡子育てライン「三尺玉ネット」との
交流がきっかけで、木沢での山菜採りやにな
ニーナでのわら細工の体験、今も続く餅つき
で交流を進めてきました。

になニーナは、子育て世代を中心に多世代・
多文化・多分野・多地域の交流を日常的に
できる場所と機会の提供をすることによって、
「人との協力・関わり」を大切に、お互いがは
ぐくみ合える社会を目指し
活動をしている
団体です。





被災地間交流

① 阪神淡路大震災の被災地、兵庫県西宮の皆さんとの交流 (平成20年から継続)

大阪大学の学生ボランティアとの交流がきっかけで、西宮市にある復興住宅入居者の皆さんとの交流が始まりました。阪神淡路大震災から13周年となった平成20年1月17日合わせ、集落からバス1台で兵庫県へ。「1.17のつどい」へ参加した後に復興住宅入居者の皆さんと交流会を行いました。その帰りにいただいた手彫りの「木製地藏菩薩」は、同年7月にお堂建立し安置されました。また、同じ年の10月には西宮の皆さんが木沢集落を訪れ交流を行うなど、今でも相互に交流が続いています。

フレンドシップ木沢の活動記録「前へ」



安置された地藏菩薩



② 二十村郷の絆を深める被災地交流

● 二十村郷集落交流会（平成20年7月）

中越大震災から4年目を迎えた平成20年7月、さまざまな苦難を乗り越え、被災地の各集落では、復旧から復興、地域の元気づくり活動を一丸となり取り組んでいました。

そんな中、昔から盆踊りなど文化面で交流の深かった「木沢」「荒谷」「小千谷市塩谷」の三集落が木沢に集まり、互いの情報交換と交流を図り連携して頑張っていくことを目的に二十村郷集落交流会を開催しました。この時、8月に再度三集落が集まり「二十村郷盆踊り」を行うことが決まりました。



第5回木沢

● 二十村郷盆踊り（平成20年から継続）

平成20年8月に木沢を会場に、荒谷、塩谷集落の他、趣旨に賛同した山古志の梶金集落が加わり、第一回二十村郷盆踊りが盛大に行われました。翌年からは四集落の会場持回りで開催され、関係集落外からの参加

者も含め150名程が集まる一大イベントとなりました。



第1回木沢



第2回塩谷



第7回荒谷



第4回梶金



屋号看板プロジェクト

フレンドシップ木沢の
活動記録「前へ」

現副会長星野忠明さんが佐渡に仕事に行った際、ある集落で屋号看板が全戸にあるのを見て、集落をアピールする良いアイデアと思い発案。すぐさま会で担当する「チーム屋号看板」を立ち上げ作業が開始されました。
不要となった樫を伐採してから五年の歳月を掛け、平成二十二年二月各戸に素晴らしい屋号看板が取り付けられました。



名誉村民

震災以降、木沢・峠集落の復興や元気づくりに支援していただいた、大学生のボランティアの皆さんなどに対し、今までの活動に対する感謝の気持ちと、木沢・峠集落、フレンドシップ木沢と未永い交流や応援をしていただけるよう、フレンドシップ木沢が「名誉村民（＝木沢・峠応援団）」と認定しその称号を贈るものです。今まで五回に渡り授与式を開催し、計三十七名を名誉村民として認定。会のイベントや集落行事へ継続的に参加いただくなど交流が続いています。

池田 浩敬	H24.3.10
柳原 幸子	
山本 桃子	
石川 大輝	
山中 智恵	
丸山 諒	H25.3.9
松沢 知生	
小倉 美樹	
番場 由佳	
村山 夏生	
小嶋さやか	
小嶋かおり	
大川 真悟	
鷲尾 雄紀	
桑原 咲子	
中澤 晃	

大西 理沙	H20.3.9
長谷川 愛	
小西 桃	
吉村 慶子	
桑山 園美	
久保恵理子	
川本 浩介	
齋藤 正文	
上野 敦	
武澤 潤	
遠藤 朋大	H22.3.13
黒田 聡子	
丸山 令子	
吉岡菜里子	
松原のどか	
佐藤 七奈	H23.3.28
早川 知子	
楡井 将真	H23.3.30
谷 香織	
高橋 要	
高森 順子	

フレンドシップ木沢
名誉村民の証
様
あはれからいただいた木沢峠集落の震災からの復興や元気づくりに対する温かい支援や活動に感謝の気持ちを込め、これからも未永い交流や応援をいただけるよう、称号として贈ります。
平成二十五年九月九日
フレンドシップ木沢
会長 阿部義夫



インターンの受け入れ (平成25年度)

集落への定住・移住者の受け入れに繋がる取り組みとして、平成25年度にフレンドシップ木沢でインターン3名を受け入れました。

1年間(4月から3月)の長期インターンには、以前から木沢によく顔を出し交流のあった上越教育大学大学院を卒業したばかりの高橋要くん、短期インターン(9月に1週間)として武蔵野大学の中澤志穂さんと千葉大学大学院の黒田美穂さんのお二人でした。3人とも木沢の隅々にまで気を配り、木沢の元気づくりに大きな足跡を残してもらいました。



中澤志穂さん

黒田美穂さん

高橋 要くん



フレンドシップ木沢の
活動記録「前へ」



今まで交流のあった 主な大学や高校

震災発生以降、多数のボランティアの皆さんから
集落復興支援や元気をいただきました。

特に大学生を中心とした皆さんからは、復興支援
から始まり現在の元気づくり支援と大きな役割を
担っていただきました。今では、学生の皆さんとの
交流が集落に住む皆の大きな励みとなっています。

大阪大学 (from HUS = 人間科学部中越地震被災者支
援有志のグループボランティアサークル)
(大阪府)

平成18年～ 集落探検ウォーク
第1回キッズ・トライ・キャンプ
西宮被災地間交流



大阪大学 H20年1月



常葉大学環境防災学部 (静岡県)

平成19年～ 震災記録誌作成支援、地域づくり支援、
集落行事への参加など





長岡技術科学大学

平成20年～
技大祭参加 など

学生のパワーが木沢を元気に

新潟大学 越後∞(や)

新大祭への参加(平成21年～)、集落行事への参加など



長岡大学

(ボランティア・地域交流
サークル [N-RINK])

シャッターアートの
作成(平成23年～25
年)、集落行事への参
加など

舞子高校 (環境防災科)

(兵庫県) 平成21年8月 被災地視察・交流で来訪





中越学生研究会「わかば会」

(長岡技術科学大学、長岡造形大学、新潟工科大学の学生)

平成17年～ サマーセミナー、ウインターセミナーなど



大阪青山大学 (大阪府)

平成21年3月

木沢集落への視察・交流



ベトナム ホーチミン市 工科大学

平成22年3月
長岡技術科学大学
入学直前研修

1 フレンドシップ木沢の リスタート

平成18年4月

「集落の再認識から始まった
→ まだ捨てたものではない！」

フレンドシップ木沢は、世帯数の減少や少子高齢化などで過疎化が進む集落を、自分達を中心となり元気にしたいとの思いで平成14年1月にスタートしましたが、中越大震災などもあり活動は休止状態となっていました。

しかし、地震後更に世帯が減少し寂しさを増す集落の元気を取り戻すため、まず自分達の出来るところからやってみようと、中越復興市民会議阿部巧さん、宮本匠さんの応援をいただきながら平成18年4月、組織を見直し（今までの区長を中心とした体制を、区と切り離れた動きやすい役員体制とした）集落の復興に向け活動を再開しました。

復興へ向かって
2つのリスタート



宮本 匠さん



いいとこどりマップ作成

最初の1年は、先進集落への視察、集落内の探検ウォーク、いいとこどりマップの作成など、さまざまな活動を通し自分たちの集落について再認識でき（まだ捨てたものではない）、また、元気をもらい、大学生の皆さんや共に復興に向けてがんばる多方面の皆様と仲間づくりが出来ました。

そして、そこから木沢集落が元気に復興する目標が見えたような気がしました。

キャッチフレーズ=きてみて最高!われらが木沢



集落探検ウォーク



法末集落視察



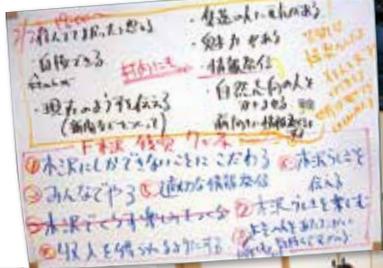
2 メンバーのリスタート・「冬会議」が変えたもの

平成20年12月～平成21年3月

「定住・永住の推進 → 復興7か条」

会がリスタートしてから3年目となった平成20年度は、役員改選により新たな体制となって始まりました。2年間の活動をベースにしながらも西宮から頂いた菩薩地蔵を納めるお堂の建設に始まり、二十村郷集落交流会・二十村郷盆踊りへと続き、秋には西宮の皆さんが木沢に来られ交流会を開催するなど、いろんな方面へ幅が広がった激動の年となりました。そしてこの冬新たな取り組み「冬会議」へと突入しました。

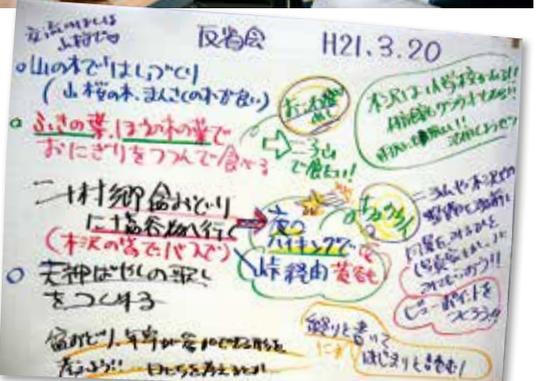
今までは、事業やイベントなど一先懸命体を動かしての活動でした。しかし、この冬会議は、体ではなく「心・想い」をぶつけ、フレンドシップ木沢の活動の原点（理念）「定住と永住の促進」をもう一度考え、次のステップアップを目指す機会となりました。中越復興市民会議の宮本匠さんの進行で、12月から開始。1月からは毎週1回のペースで会を重ね、3月までみんなで真剣に議論を深めていきました。8回に渡って開催された冬会議で、活動の理念である「定住と永住の促進」に



ついでに共通の認識が生まれると共に、今も活動の柱となっている「復興7か条」がここで生まれたのです。

『生活のリズムが狂った?』というメンバーもいるほど大変だったこの冬会議を、最後までやり遂げたことは会にとってもメンバー一人ひとりにとっても大きな自信となりました。

また、この取り組みが、平成21年度から始まった復興デザイン策定事業、復興デザイン先導事業などへの大きな弾みとなったことは間違いありません。



ヤマの匠プロジェクト

全体のイメージ

デザイン策定の理念(目標)

定住促進と永住促進



定住促進と永住促進

事業の実施

ヤマの匠プロジェクト

環境整備事業

やまぼうしプロジェクト
山と虹プロジェクト
道プロジェクト

体験交流事業

木沢学・復興七か条
＝
活動を支える要素

地域復興デザイン策定事業及び 地域復興デザイン先導事業の実施

新潟県中越大地震復興基金を活用し、集落の復興を目指すための計画策定(=復興デザイン策定事業)とその計画に基づく事業の実施(=復興デザイン先導事業)に取り組みました。この復興デザイン計画が今のフレンドシップ木沢の活動ベースとなっています。

地域復興デザイン策定事業(平成21年度～22年度)

復興デザインの策定は、(株)新潟博報堂に業務を委託し行いました。平成21年7月から本格的に進め、集落や関係者へのヒアリング、フレンドシップ木沢の定例会や冬季間に集中して計画作りに取り組んだ「冬会議」、村上市や上越市などへの視察研修を経て、平成23年3月に完成しました。

- ▶復興デザイン策定発表会(平成21年5月)
基金申請に当たって、策定の方針などを発表。



◀フレンドシップ木沢への初期計画案のプレゼンテーション



◀デザイン策定最終報告会(平成23年3月)

地域復興デザイン策定の概要

震災を受け深まった集落の絆や一体感、また、これまでやってきた体験交流事業などにより集落を訪れた人々との交流を通し、今まで木沢(ヤマ)で暮らし培ってきた「技」や「知恵」の伝承、棚田や横井戸技術、養鯉業や牛の飼育など、ヤマで生活するための年間を通して行われている様々な営みの大切さに気づきました。そしてこのヤマの暮らしを活かしていくことが、自分たちの身の丈にあった、持続が可能な事業実施が行えると思います。

ヤマで暮らす人以外に、「やまぼうし」を拠点にして木沢にしかない「ヤマの暮らし」を体験していただく、地域の人と交流の輪を広げ「訪れた人」も「住む人」も互いに元気になれる、将来像をデザインすることを目指しました。

- ⇒ 地域に住む人全員が「ヤマの匠」になる
- ・「やまぼうし」を含め、集落全体を資源として活用する
- ・事業による互助互立の取り組み

▶「ヤマの匠プロジェクト」と命名



柱1 環境整備事業(ハード事業)

※ヤマ=木沢集落

名称	やまぼうしプロジェクト	山と虹プロジェクト	道プロジェクト
目的	体験交流センター「やまぼうし」をヤマの核施設にする	ヤマの自然を活かす	ヤマを居心地が良く楽しめる場にする
事業	<ul style="list-style-type: none"> ● 駐車場側に花壇を整備し、集落内外の人が集まれる場にする ● グラウンドへ続く導線として枕木舗装と階段を設置 ● グラウンド県道側に展望テラスを設置 ● やまぼうしの植樹 ● 情報発信するため、パソコンの整備やHPを開設 など 	<ul style="list-style-type: none"> ● 二子山山頂付近に、展望台、広場を設置。 ● 二子山ふもとに森林浴の広場を整備 ● 二子山の資源調査と活用 	<ul style="list-style-type: none"> ● 集落看板。見どころ看板を整備する ● 景観整備のため検討を進める

柱2 体験交流事業(ソフト事業・今までの継続事業)

- 山菜ふれ愛ツアーの開催
山菜採り、料理教室などを通して、木沢の自然を満喫してもらう
- 木沢流防災体験塾の開催・雪かき道場の開催
震災を有する集落であることを自覚し、震災など自然災害の経験や防災について伝えていく

地域復興デザイン先導事業（平成23年度～24年度）

平成23年度から2年間、復興デザイン策定事業に掲載された「ヤマの匠プロジェクト」の各事業を実施しました。
川口体験交流センター「やまぼうし」の周辺整備、二子山の山頂付

近やふもとに展望台や広場整備した他、県道沿いにある共同車庫に木沢の懐かしい四季を描く「シャッターアート」の取り組みを行いました。施工には県内の大学生から大きな力を発揮していただきました。



枕木舗装



花壇



▲さまざまな情報を掲載したホームページ
※「ようこそ木沢へ」で検索

やまぼうしプロジェクト

やまぼうしを木沢集落の核施設として、集落全員が関われる場所、集落内外の人が気軽に寄り合える場所を目指し、駐車場側への花壇整備やグラウンドまでの枕木舗装、展望テラスの整備の他、情報発信を行うためホームページを作成しました。



展望テラス

山と虹プロジェクト

二子山周辺の自然を活かすため山頂への展望台の設置や広場の整備、また、森林浴の広場などの整備を行いました。整備に当たっては多くの大学生の皆さんなどからご協力いただきました。



展望台の工事 測量中



山頂広場の様子



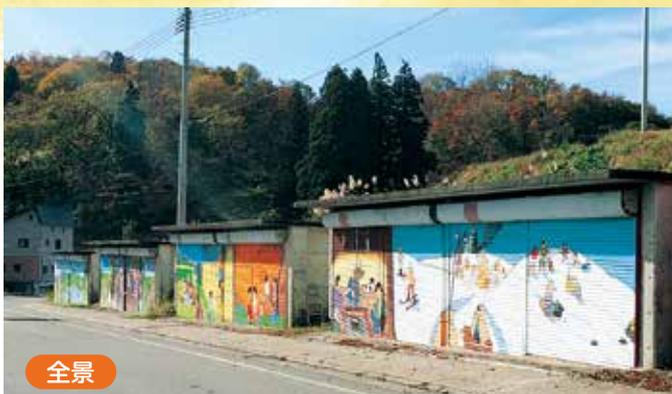
森林浴の広場



展望台完成

道プロジェクト

集落を訪れた人に楽しんでもらう仕掛けとして、集落中心部にある共同車庫（16台分）に木沢の懐かしい四季の風景などを描く「シャッターアート事業」に取り組みました。平成23年度から平成25年度までの3年間に渡り、長岡大学の学生を中心に集落の人と一緒に作成をして、見事に完成しました。



全景



1年目 夏

木沢区の活動

賽ノ神



三志会

三志会は前からあった青年会を引き継ぐ形でつくられた組織です。メンバーの平均年齢は六十歳程度です。みんな仲が良く活動の時は直ぐに集まってくれるので、まとまりのある良い組織だと思います。

主な活動は夏の「盆踊り」や、冬の「さいの神」で、その準備で毎年大変です。だから、活動自体は震災前も今も変わりがありません。

ただ、震災から十年が経ち、勤め人も定年を迎え、近くの田んぼや畑をやっている人や仕事が無い人も増え、みな木沢のことを考えられる時間が増えてきたと思います。



神社の清掃



盆踊り

ベルフラワーの会

組織の名前の由来は花の名前で、星野忠明さんが震災前に役場の働きかけでこの会を立ち上げた時に、小学校の上村がおり先生に付けてもらいました。活動は、集落内や体験交流館「杜のかたらい」前の花植えや花の周りの除草などの管理をしています。震災直後の一年は、雪も多く苗も育てられないため、やるぞという気持ちにもなれず活動が止まっていました。当初より活動する人は減ってしまいましたが、花を見て通りすがりの人が『綺麗に咲いているね』と話しかけてくれるのが嬉しく、これからはこれまで通り続けていきたいと思っています。



活動内容自体は今も震災前と原則変わりませんが、震災があったことで地域、家族のために頑張らなければという気持ちが強くなりました。普段の活動は、日帰り旅行や施設見学、勉強会、ほかに草刈りなど地域貢献活動も行っています。草刈りでは、昔からの農作業で培ってきた技術があるので慣れたものです。それを若い人たちに伝えて行くことが必要だと感じています。

やはり、みんなで外へ出て作業をしたり顔を合わせて飲んだりすることで張り合いが出てきます。

老人会



やまぼうし下の花植え



ぎしばりの会

元々「若妻会」の名称で、外部から嫁いで集落にまだ慣れていない若いお嫁さんたちを対象にした交流会が始まりで、月一回お茶会を開いたり、みんなで旅行の計画などを立てたりしていました。今は皆が歳を重ね「若妻とは言えなくなってきた」ということになり、現会長が「ぎしばりの会」に改名することを提案してくれました。

「ぎしばり」という名前は「ジシバリ」という、木沢に多く見られ地へはびりつきながら目立つことなく力強く生えている、小さなタンポポに似た花を咲かせる雑草からとりました。

現在は、集落の行事などの要を担っているほか、月一回、会館よりの定期的な清掃奉仕活動を行い、やまぼうしオープン以降は「賄い班」としても活躍しています。運動会ではパーベキューの担当、よりあいつでは女性たちの先頭に立ち、川口まつりの総にわか、二十村郷盆踊りでは踊り手として、パワーあふれる欠かせない存在となっています。

すみれ会

すみれ会は震災から一〜二年後につくられた組織です。二〜三時間のお茶会を月二回行っています。みんなが集まって、お団子づくりなどをしながらお喋りもしています。家から出て、みんなと顔を合わせることに意味があると思っています。

それこそ、震災が無かったら出来なかった組織で、今まではあいさつ程度の付き合いだった人とも、互いに顔を見れば話せる仲にもなりました。活動のおかげで、知らなかった人との交流が生まれてました。



木沢棚田保全連絡協議会

木沢棚田保全連絡協議会は平成十九年から活動を行っています。

木沢集落での主な役割は草刈りや農道の整備だけでなくイベントなどを行い、県内からだけでなく県外からも人を集め木沢を盛り上げることです。子供たちの元気な姿を見ることが震災をきっかけにボランティア等で入ってくる若者と会話をすることでパワーをもらえます。

十年後の展望としては集落から集落全体、市、県へと規模を大きくして輪を広げていくことです。若い世代に木沢の良さを知ってもらうことが大切と考えています。



木沢陶芸の会



地域での特色ある教育を進めるため昭和六十二年、学校と地域が一緒になり集落内の陶芸にあう粘土を探し制作を始めた。同年小型ガス窯を購入し、学校、公民館で木沢陶芸教室を開くことになり、会員数も多く週一〜二回程度開催しました。

さらに、作品も多くできるようになったことから穴窯を作る計画となり、平成元年に現在の場所を借りレンガ等は東芝さんよりいただき完成しました。PTA、会員で行った初めてのマキ割り、焼成に大変苦労したことを今も思い

出します。平成七年には、宝くじの助成をいただき木沢公民館に大きなガス窯も入りました。

穴窯用のマキを集めることで多くの皆様のからご協力をいただきました。現在もいろいろな団体と体験を通じ交流をしながら頑張っています。

震災後も変わらない活動をしていきますが、会員も少ないのでぜひ入会いただき、世に一つしかない自分の作品を作ってみませんか。これからも大切な木沢の宝として守っていけるよう頑張りたいと思います。

里山食堂



里山食堂は外から木沢に人を呼ぼうと思ったことをきっかけに平成二十三年頃始めました。

初めは補助金だけでは足りず苦労しましたが、お客さんが沢山来てくれることで今も続けられています。

蕎麦は和南津、天ぷらになる山菜や野菜も地元でとれたものを使っています。

お客さんから「おいしかった」と言われることが嬉しく、やりがいを感じます。そうしたお客さんがいる限り続けていきたいし、続けていくためにもそろそろ若い人へのパトナタッチを考えています。

A watercolor illustration in shades of yellow and orange. At the top right, there is a large, textured tree with many small leaves. Below it, a grasshopper is depicted on a long, thin blade of grass. The background is white with scattered watercolor splatters and a faint, light blue diamond shape.

一人ひとりの復興と
未来へのメッセージ

復興に向って



未曾有の激震を受けて早や十年を向えました。

返り思えばよくぞ頑張ったなあと思ひ起します。また、恐怖も思ひ浮びます。それには当時の集落

の一致団結は勿論の事、県内外からの限り無い多くの方々の助けを戴きました。今こそ思い改めお礼の言葉を申し様もございませぬ。互いの助け合う事に勝る物は無きと申し上げたいと思ひます。

以来復興に向け私達集落活動団体フレンドシップ木沢として地域集落の活性化にどう立ち向かうか!! ビジョンを描きながら元気な生涯へと必死に活動を続けて参りました。

幸いにして旧木沢小学校を、廃校利用として大改修工事が竣工。平成二十一年十月に川口体験交流センターやまぼう

しとして利用する事が出来ました。巾広く多くの交流を深めコミュニケーションを強化し更に絆を深め元気な生活に導ければと思ひます。またこの十年間復旧復興に向けた長岡地域復興支援センターが設立致し、私達への活動の大きな支援となった事は事実と思ひます。

今後同様な支援制度を是非継続戴ければ、益々へと活性化致し、これを後世に伝えて行ければと思ひます。

全国の皆さんありがとうございます。

ふるさとへ帰る

四十数年ぶりに生まれ故郷に帰って、暮す事になり、月日の経つのは早いもので五年が過ぎた。

母親が数年前に亡くなり、父親との二人ぐらし、少しばかりの田んぼと畑ですが、春になると何かと毎日が忙しい。

田んぼの準備と畑に野菜の苗を植えたりと、父親に聞きながら、ようやく一人で何とか食べられる物が取れる様になり感動。

子供の頃、母が作ってくれた物を当り前の様に食べていた野菜も自分で作ってみると、大変さが良くわかって、ちよっ

と位形が悪くてもとても美味しい。

田んぼも種蒔きからやっているの二人ではとても出来ず、幸い近くに私の兄弟が住んでいるので、その度、応援を頼んで休み返上で頑張ってくれます。

おかげで秋には美味しいお米が食べられる。

ほっとするのもつかの間で、又、長い冬の始まりです。三、四メートルも雪が積もり、さすがにびっくり。

雪カキも朝に晩にと疲れだけが残る、それでも、又、春が来ると忘れてしまい、田んぼに畑に忙しい毎日を送る。

この歳になって四季を感じて生活できる事に感謝したいと思う。



鹿 蔵 小林 四郎

我が家の復興とこれからの木沢

中越地震により、木沢集落の世帯数が減少しましたが、自

分自身は震災前と後では変化はありませんでした。震災前は畑で、マメやナス、キュウリなどを栽培していました。震災によって畑仕事は辞めました。震災が起きていなかったとしても、高齢のため畑仕事は辞めていたと思います。震災により家は半壊しましたが、一年程度で直ったので大変ではありませんでした。

しかし、地震は本当に怖かったです。自然災害の中で一番怖いと思います。地震は人間がどうにかできるものではないので、後に残った人間が頑張るしかないと思います。今は息子と娘が会いに来てくれることが一番嬉しいことです。

今後も木沢集落の人口は減っていくと思いますが、十年後も木沢集落に残ってほしいです。自分自身も生きているかわかりませんが、今、集落で最高齢の九十六歳を目標にしたいです。これから、今まで通り新聞とテレビを見て、木沢で自由に暮らしていきたいです。



※この文章は、常葉大学の学生が本人に聞き取りを行ってまとめたものです。

生きて居る幸せ

震度七の地震。今は忘れかけて居る。家の中は物が落ち、物がたおれ居場所がなく、外に出れば屋根瓦が落ち、上を見れば電線が今にも切れそうにゆれて、道路に出れば舗装が陥没、通行が不能となり家は全壊、棚田もくずれ田に行く道路も陥没。

大震災から十年。全国の皆さんから復興復旧に本当に感謝をして居ます。

今では地元業者から棚田を復旧してもらい、高齢ながら米作りに野菜作りに頑張っています。



我が家の復興とこれからの木沢



地震が起こった当時、私はまだ田んぼで稲作の作業をしていました。自宅は震災の揺れにより瓦が落ち、歪んで斜めになってしまいました。が、この家を修理し、

現在でもここに住んでいます。七十代後半になっていた自分の身体と今後のことを考え、震災を機に稲作をやめる決断をし、今は畑一本で野菜などを作って暮らしています。見慣れた木沢の道や山が崩れ、家も壊れてしまい残念に感じています。正直、町に下りようか、という気持ちもあります。

そんな日々の中、私には今現在でも続けている楽しみがあります。それは本を読んだり、歌を詠んだり写したりすること。若い頃、横浜の方に土方として出かけていました。その時に一緒にいた方が大変な読書好きだったため影響されて本を読み始めました。今でも小千谷の古本屋に行くとな数冊ほど購入し自宅で楽しんでいます。好きな書籍や歌を見つけて

は書き写したり、自前のノートに好きな作家についてまとめたりしています。越後山脈がずっと見える美しい木沢の景色が大好きです。

※この文章は、常葉大学の学生が本人に聞き取りを行ってまとめたものです。

峰蔵

星野春吉・和子

我が家の復興とこれからの木沢

震災によって集落の人がまちの方へ下りて行き戸数が少なくなつたことが残念に思います。それでも多くのボランティアの方々が来てくれ、中でも大阪から来た看護師のボランティアさんが印象に残っています。震災直後は道路が寸断され薬に困ったり二日間よろみの前で野宿したりと大変でしたが、避難所の体育館ではご馳走が食べられました。自宅は半壊の被害判定を受け、小出から来た大工さんに修理して



もらい木沢集落の中でも家の復旧は早い段階で完了しました。震災を機に田んぼはやめ今は畑のみをやっています。畑での作業が終わった後に一服するのが楽しみです。木沢で過ごせることが幸せで生まれ育ってきた土地だからなおさらです。のんきに生活できる山の環境も気に入っています。(春吉さん)

私は、旅行と歌が好きです。特に旅行は老人クラブでの日帰り旅行のほか、一人でよく温泉に行きます。木沢のみんなは心優しくて仲が良いところが自慢です。(和子さん)

※この文章は、常葉大学の学生が本人に聞き取りを行ってまとめたものです。

長兵衛

星野正夫

十年の想い

中越地震から十年の時が過ぎ、この間にも中越沖地震あり、東日本大震災ありで被災者は私達だけではない事を改めて思い知らされています。比べ物にならない程の災害を体験し、それでも前を向いて生きていかなければならない現実と向き合う姿をテレビの画面で見ると自分達はなんて恵まれていたのだろうと思ってしまう。

何時まで続くかわからない余震に怯え、枕元に懐中電灯を



置いてふだん着のまま玄関の近くで眠った事。車の中で二週間以上夜を過ごした事。復旧工事がなかなか終わらなくて二年以上も過ぎ忘れられてしまったかと不安になった事。どれも忘れられない思い出です。

そんな中、震災を機に実に多くの方々が木沢を訪れ、私達を多方面から支えてくれた事は何よりも嬉しく、自分達が忘れられていない有難さを感じています。村民が年々歳を重ねていく中で、決して明るい未来とは言えませんが、その時その時を少しでも前向きに過ごす事ができた様に思っています。ありがとうございます。

勝兵衛

平澤 勝幸

中越大震災から十年。これからの十年。

中越大震災後も日本各地に度々起こる地震。震災により奪われた「モノ」は各地で異なりますが、得た「モノ」はどの



土地でも同じではないかと感じています。人それぞれ様々な受け止め方があるかとは思いますが、この十年間震災によりうまれた人との出逢いや繋がりは少なくとも復旧・復興に繋がってきたと思います。自然災害では壊すことのできない人との繋がりがこれからの十年を大きく変化させ、震災前よりも良い環境を作り残していく事が私達世代の役目だと感じています。

震災からの十年。復旧した田んぼを使って木沢棚田保全協議会を立ち上げ、県内外から十六組のオーナーを受け入れた事から始まり、被害にあった家を解体せずに時間をかけて修復し農家民宿として建て直し、多くの人達の受け入れを行いながら多世代交流会などのイベントを開催してきました。

これからの十年。木沢集落



も過疎化が進み世帯が激減してしまうその前に、越後三山や四季折々の景観がどこよりも美しい木沢へ一人でも多くの人達に訪れてもらい集落の良さを伝えながら残していけるように、次の世代へ受け継ぎ集落の存続を強く願いながらこれからもこの土地と共に生きていきたいと思えます。

甚平家持

星野藤一

あれから十年

地震は他の国から始まる。オレ達の所へ地震なんて来る事ではない感じがするが、十年前の中越地震は思い出しただけ怖い経験だった。学校に退避し村・町からの炊き出し、道路の寸断、連絡道路の確保、様々の支援応援を頂きボランティアの方々で大変なお世話様になりありがとうございました。とうございました。此方おかげ様で還暦より七十一歳になりました。あと十年はどうか？ 考えます。大阪の沢田さん大変



世話になりました。ありがとうございました。何もお礼をしなくてすみません。今年も農作業を頑張ります。元気でさようなら。

全国からの支援ありがとうございました。

観音堂

阿部義夫

地震の大きさを数値で知る



する。

地震大国、日本などと言われている位に、情報等がたびたび報道されるが、中越大震災を体験した私たちは、情報を聞くことよって度合いが想像できる。

二〇〇七年に発生した中越沖地震直後に、おぢや元気プロ

甚大な被害を被った中越大震災から今年十年目という節目を迎える。復興記念誌制作部会各位が、真っ向から取り組んでいる姿に感銘

ジエクト理事長若林和枝さんより被災者ネットワークを設立された話を聞き、できたら木沢の知り合い仲間に、お声かけしていただけないか：できたら一緒に支援活動に行けないかとの相談だ。中越地震の時は、私たちも大きな支援を頂いた：ご恩返しのお気持ちで即座にOKサイン。被災者ネットワークメンバーに加わり、木沢から数名づつ、交代で二日間活動を共にした。

・一九九五年に発生した阪神・淡路大震災がマグニチュード七・二の、とても大きな地震。この冬、集落内の道路除雪を担当、下村から順に進め旧トンネル路線で除雪中運転室内のラジオからの情報で知った。

・中越大震災・中越沖地震、マグニチュード六・八。

・東日本大震災では、M九・〇という、とてつもない地震で大津波が発生し、海岸平野部を次々と襲い、驚くべきありさまでした。今年三月十二日の農業共済新聞、特集面で復興への思い！を拝読した。

・岩手県女性：大切な仲間と力を合わせて

・宮城県男性：結果を残して恩返ししたい

・宮城県女性：本気の酪農で搾乳続ける

・福島県男性：何年掛けても農業を再開

・福島県女性：福島で農業続けます

復興への熱い思いを胸に皆さん頑張っています。復旧・復興が前進されます事祈願いたします。

・我が家では地震発生時、川口温泉厨房で熱湯ヤケドを負っ

た妻が多くの方々に助けて頂いた。妻のヤケド跡の回復を願って、家族皆で話し合い家は改築を諦め新築した。大震災で全国からの支援で復興が進んだことに感謝。繋がりができた多くの皆様方を決して忘れません。僅かな田圃も復旧を終え、今年から全面作付けできた。稲穂が、少しづつ見えるようになってきた。病気せぬよう心がけ、農業を続けて行く。

四郎八 阿部和雄

中越地震から今年で十年 十月二十三日

年々住民が歳をと
りこの先何年生きて
いけるか、五年、十
年、二十年…？
地震から少しはな
れて木沢の四季を書
きます。



地に花、人に心、木沢の四季 阿部和雄

春は桜の花が咲き、夏は涼しい風は吹く

秋には美しい月が輝き、冬には雪が舞い降る

木沢には美しい四季の移ろいがあります。一年中すばらしい時期でもあるにもかかわらず、それに気づかないのは、私たちの心がほかの雑多なことに惑わされているから夏は暑い、冬は寒いと嫌なところばかりに目を向けていたら、せっかくのすばらしい季節も楽しめないまま、あっという間に過ぎ去ってしまいます。いつだってすばらしい時だから

それを楽しめる気持で

毎日をすごしたいと思えます。

十二ノ脇

星野正良

十年目の想い

あの日、突然おそってきた大地震。被害の大きさに、これほど恐ろしいものだったとは知るよしもなかった。心の奥底には未だあの恐怖や引きさかれた集落減少の淋しさは消えていない。当時はやむをえず、ふるさとを離れなければならなかった人達を目のあたりにし、自分も折れそうな気持や集落の存続を案じてきたが、あれから十年という月日を迎えた。

今は行政や全国から支援応援をいただき、家屋や道路、田畑の復旧が終り見た目は元の姿にもどった。住みなれたこの

地で再び生活が出来る喜び、おかげさまで今日まで家族が元気でこれたので平凡な日々を送られてることが何より思っている。

復旧から復興への合言葉には地域復興支援員をはじめ全国各地から応援をいただきながら「フレンドシップ木沢」の活動に参加し、集落再生に向けて数々の活動を行なってきたことが自分にとっても集落の人達にとっても少なからず日々の元気の源になり活気づいたと思っている。

現在も「やまぼうし」には、大勢の御利用をいただき、いろんな活動を通じてもたくさんの方がきていただいているありがたさを感じてる。震災によって失ったものもたくさんあったけど、得たものもまたたくさんあった。



さまざまな多くの人達との出逢い、人と人との絆の大切さを知り、パワーをもらってきた。今日まで支えてくれたたくさんの人達に感謝を申し上げ、時々顔を見せていただき集落を見守ってほしいと思っています。

考察 〈集落復興の形〉

震災から十年が経とうとしています。何か遠い昔の出来事のような感じがしています。いい意味での風化が自分の中では進んでいるのかもしれませんが。

しかし、たった一人ではあっても人命が失われた事実はしっかりと記憶に留め重く捉えていかなければなりません。また、家屋を失って木沢を離れるしかなかった人たちの思いも決して忘れてはいけなと思っています。

一方、木沢に残って復興の道を歩んだ多くの住民にとっても、震災の爪痕は深く、困難の連続だったことと思います。それでも、順調に復興が成されていったのは行政や国民の皆様の支援のおかげと強く感じていることです。

さて、個々人の復興は悲喜こもごも、一概にその結果を論ずることはできませんが、集落の復興は行政と共にフレンドシップ木沢（以降F木沢）の役割が大きかったと思っています。そのF木沢は大学生を中心としたボランティア活動の拠点として再活動を始め、学生や地域復興支援員らと共に集落の活性化に取り組んで来ました。そして、この十年間で復興のトップランナーと言われるまでになり、F木沢の活動は内外に認められて来たのです。

しかしながら、その活動とは裏腹に集落の世帯数は減少し続け、震災前（二〇〇四年）は五十六軒だったのに対し、二〇〇六年は四十二軒、現在（二〇一四年）に至っては三十二軒と、十年間で二十四軒（四二・九％）の減少となっ
てしまいました。この過疎化、高齢化は長年中山間地共通の深刻な問題とされて来ましたが、震災により一気に加速されたことで改めて浮き彫りになった訳です。残念ながらF木沢の活動もその流れを間近で見ながらどうすることも出来ませんでした。

とは言え、その活動は交流人口を確実に増やし続け、集落の復興が集落の人口を増やすことだけではないと言う新たな概念を作りつつあります。つまり、「集落の復興＝交流人口を含めた人口増」であっても構わないのではないかと言うことです。それが現実的な復興であり、F木沢の活動が無駄ではないという証明にもなると思うのです。



最後に、やがてかつての百軒の集落は伝説となり、震災を乗り越え木沢と言う集落を世に発信し続けた三十軒余りの集落は歴史に残り、そして、山の暮らしに生きがいを求めて僅かな人々がこの木沢に移り住み、また語

り継いでいく、そんな未来の形を想像しながら、そんな一握りの移住者を思い描きながら、私たちの活動は続いていくのだと思います。
故に復興は道半ばです。

蟹原 星野正孝

中越地震から十年

地震国日本。新潟県も新潟地震から五十年、昭和三十九年の六月に新潟地震に見舞われました。五十年後中越地震に私達が遭いました。思えば早くも十年の月日がたちました。



震度七の震源地になるなど思いもよらぬ出来事でした。まして避難所の指示指定もままならない有りようでした。その後集落センター前に集りセンター前での避難生活とあいなりました。あいつぐ余

震におびやかされながら、集落民必死になり不安な何日でした。不幸に一人の犠牲者が出てしまいました。センター前野宿が二日続きました。夜の寒さをしのぐためまきを焚き暖を取りながら過し、ようやく小学校体育館に避難生活が始まり、集落民皆協力しあい不自由な生活をしいられました。こんな経験はわすれられぬ思いで今日でも目にうかんできます。それでも全国からの支援やらボランティアの人達に助けられて今日があると思う日々ではないでしょうか。阪神大震災から東日本大震災、長野北部震災、たてつけ震災に見舞われております。

伴蔵 小林恵子

もう十年も過ぎたなんて

地震後の一年目から三年目くらいまでは、すごく長い長い一年間でした。やっぱり余震がいつまでも続いていたからでしょうか？ 揺れるとあの時を思い出し恐怖をずーっと感じました。だんだん揺れなくなったら思い出すこともなくなり、他の事に目をむける事ができて少し落ちついたような気がします。

でも地震で家がこわれた人、池がだめになった人、田んぼ

がくずれおちた人、亡くなった人、木沢を離れなくてはならなくなつた人、本当に人生がかわってしまった人、やっ

家を壊して遠くの知らない土地へいつてしまった人、やっぱりかわいそうですね。何十年も住みなれたこの木沢を離れるのは辛かったと思います。あれから十年が過ぎ、新しい生活になれた事を願っています。震災の時、避難所として使わせていただいた木沢小学校が今は、宿泊施設「やまぼうし」としてオープンし、木沢集落の観光施設になっています。なるべく地元の新鮮な野菜を使った料理を食べてもらえるようみんなで頑張っています。

地震後みんなも頑張ったけどフレンドシップ木沢の人達は頭がさがります。毎月の会議、決めた事への作業、実行、自分の家の事もいそがしいのに村の人達が住みやすくなり、元気が出るようそれだけを考えずーつとやってきてくれました。木沢にできれば民宿があり、遊歩道があり雄大な自然がありと、大勢の人からきてもらい、またきたいなあ…と思つて



もらえる事をずーつと、話し合つてきましたね。

私達も地震の時は五十代、それから十年過ぎ今は六十代、その間にはあちゃんが亡くなり、孫が四

人も産まれました。これからの十年後は、想像もつきませんが、でも大好きな木沢で、ゆつくりと過ごせていければと思っています。

四郎右エ門家持 星野隆一

あれから十年

震災後我が家で大きく変わった事といえば、父が亡くなったことです。震災によるストレスによる、病気が原因だったのかもしれない。早いもので、昨年の七月で七回忌を迎えました。父が亡くなったことで、自分が農業を始めることとなり、いざやってみるとなかなか楽しいものです。

自分の会社でも、復興事業に関わり、水源確保のための、井戸掘削工事をしていました。毎日が忙しく、あつという間の十年間でした。

つい先日、二子山でのんびり山の景色を見てみると、地震当時に比べ山が緑に染まっている事に感動し、自然の力はすごいなーと、つくづく感じました。

あれから十年、震災を体験したことにより、多くの方とめぐり合う事ができ、いろんなところとの交流が始まり、普通では体験できないことを、体験できたことは、一生の宝物だ



と思います。これ
からもより一層頑
張り、木沢の良さ
をアピールし、移
住者ができるよう
頑張りたいと思
います。

あと十年もすれ
ば、自分も七十近
くになり、その時

集落はどうなるのか、今はとても不安なところもあります。
子供たちへのメッセージとして、この木沢をいつまでも愛し、
この自然豊かな地を守り、住んでいて良かったと、いつも笑
いの絶えない人生を、この木沢で過ごしてもらいたいと思
います。

木 挽 小林 正 利

あれからの十年

平成十六年十月二十三日中越地震発生から十年を迎え、私
は何をして来ただろうか。



まさに我が家の復興と地域活動につきるだろう。生業である
稲作りが山、沢、田のヒビ割れによる水脈低下により水が無い、
田直しと用水確保、ようやく三年目に作付が出来、やっと元
に戻った、その後悪い所を手直しをして現在に至っている。

地域活動、無料奉仕作業、木沢集落の再生や如何に
若者、中高年の仲間が真剣に考え、楽しい明るい、元気の
出る集落にしよう、学校閉校平成十五年。体験宿泊施設「や
まぼうし」開設管理運営、二子山整備、遊歩道、展望台、森
林浴広場開拓、砂利敷、ウッドチップ敷き、屋号看板、シャッ
ターアート絵画完成作業と大勢の仲間と共になした。こ
こに木沢の団結の力、現われる。良くやった。

大自然に恵まれた木沢を外部に発信、多くの人々が来村、
共に楽しみ、ストレス発散。思い出の地になってほしい。い
ままでこんな事が出
来たであろうか。地
震からの意識改革の
変化だと思う。

やれば出来る、み
んなの仲間の力で大
いなる成果が出来た
と思う。

十年の歳月は長く
もあり、目の前に来
た。十年一昔、余り

にもいろいろあった。悲しみと苦悩、立ち上がる気力、年令と共に体力は落ちる、今後は静かなる晴耕雨読の老後に入りたいものである。

震災から得たもの、一度しかない人生を、如何に生きるか。

銀 蔵

星野幸一郎・イツ

我が家の復興とこれからの木沢へ



震災当時は家が傾き、自分たちがやっていた田んぼまでの道も崩れるなどの被害を受け、先の見通しが立たず将来のことを考えるとどこではありませんでした。

た。その中でも外部から多くのボランティアが来てくれたことがとても暖かく感じられました。また、避難所で協力して過ごしていくうちに集落の人の良いところも見えてきて以前よりも人付き合いが深くなったと思います。余震が続いたときは、集落の人と集まっていることで心強く思え、不安が和

らぎました。避難所生活や家の修理など大変なことは沢山ありましたが思い返せば、震災から現在まではあつという間の十年間でした。

現在は、六匹の猫に癒されながら夫婦揃って毎日元気に生活していただけることが幸せです。畑仕事も生きがいの一つで、季節ごとに旬の野菜を収穫し、お隣さんにもお裾分けをしています。十年後も、ここ木沢で集落内最年長者である福太郎さんのように元気に過ごしていることが目標です。

※この文章は、常葉大学の学生が本人に聞き取りを行ってまとめたものです。

万 七

星野計次郎・智恵子

我が家の復興とこれからの木沢へ

地震の時は家だけでなく、その周辺や貯水池、田んぼも全部やられてしまいました。元の生活に戻れるか心配でしたが、今後の生活を考える暇もありませんでした。でも震災後はボランティアの方々や、娘とその知人たちに随分助けられました。家は人の繋がりのおかげもあり、震災後一年で建て直すことが出来ました。自分の家に戻ることが出来た時は、とても嬉しかったです。田んぼは震災から三年目の時に直す



ことが出来、復旧のために行政がお金を出してくれました。ただ、復旧するにも「直して二年以上は農業を続けてもらわないと困る」と条件が出されました。その時、既に七十

歳を過ぎた頃で心配もありましたが、十年経った今でも続けられています。歳も歳だから生活自体が大変になってきてはいますが、田んぼづくりは生きがいの一つです。

震災があったからこそ、思いやりや助け合いといった、今まで気付かなかったことに気付けるようになりました。そして、二人で今まで頑張ってきたことが何よりです。

※この文章は、常葉大学の学生が本人に聞き取りを行ったまとめたものです。

与五郎 星野伸一

震災から今日まで

忘れもしない十年前十月二十三日午後五時五十六分あの大

地震は起きた。我が家は全壊。集落内でも七十%を超える大被害を受けた。田んぼは跡形もなく地震にもってゆかれ、見る影もない。田んぼの復興はあきらめた。田んぼはあきらめでも家の復興はどうするかその冬中考えた。その結果小さいながらも新築することを決めた。翌年の五月に棟上、七月には引っ越しの運びとなった。我が家が再建出来たのも全国の皆さんのおかげと感謝の気持ちでいっぱいだ。その後、部落の家も、道も、田畑も復興し今に至っている。

まずこの震災で思った事は、一人や二人の力では何も出来ないということ。道路の復旧にしても、だれともなく迂回路を作って、生活道路を作ろうと始まり、自分たちだけで直したという話は川口町内でも有名だったらしい。その何年後かフレンドシップ木沢が復活、その働きが集落の復興にとっても貢献したという事は言うまでもない。今でも各部会で年間を通し、色々なイベントを村おこしのためにやっている。



私も今後より一層木沢集落が栄える事を、フレンドシップ木沢の一員として願っている今日のごろです。

雑 感



地震なんて他人事、地震で被害を受けた人々は大変だね、可哀想だね、よもや自分達が地震の被害に遭うとは思ってもみなかったと言うのが本音だろう。

十月二十三日 十七時五十六分

あの時の事は今でもはつきりと覚えている。すさまじい上下動、夢々地震とは思わなかった、二度目の揺れでやっと地震だと気がついた。恐ろしさ、ぶきみさ、そして暗さが一段と恐怖心をかきたてる。まず命を守る事、自分そして家族、そして回りの人々、しかし何をすれば良いのか、自分自身の決断力のなさに心細かった事を覚えている。集落の人々が集まって来ている話合った。そして力を合わせて少しずつ前を向ける様に成って来た。お互いに何をすれば良いのか皆わかっている、これこそ木沢の底力だと思った。マキを用意

する人、水を確保に走り回る人、朝ゴハンの準備をする人、被災した家々を回って電源を切り水道のバルブを止め灯油タンクなどを見回り火元を見てまわる。木沢衆の力は誰にもどこにも負ける事の無いものだと思う。「自分達の出来る事は自分たちでやろう」この心意気が「命の道」自力開通に向かったのだと思う。ただ残念でならないのは尊い人命が地震に依ってうばわれてしまった事だ。

もうすぐ十年が経つ、すぐ前に起こった様な長年経った様な複雑な心境だ。地震の一ヶ月前に産まれた初孫がこの春小学校四年生に成った。十年と言う年月が流れ去ったのだとつくづく思う昨今である。

四郎右エ門

星野 隆 則

震災から十年

いま思うと復興記録誌を読まないと思いだせないところもあります。

○震災から現在に至るまでの経過。

○大変だったこと、自宅が全壊でしたので翌年に住める状態にして今も暮らしています。

○つらかったこと、父と母が亡くなりました。

○よかったこと、両親の墓を建て直しました。田んぼも大きな被害を受けましたが復旧して人に委託しています。

○楽しかったこと、野菜の収穫です。

○エピソード、自分の車で真冬の国道十七号線を車が滑り、反対車線にでて雪壁に衝突してケガも無く、車が少し壊れてしまい対向車に当らなくてよかったです。

○十年間で一番変わったこと、二十七年間勤めた会社を辞めました。

○未来へのメッセージ、十年後の集落、あるていど過疎化が進み集落のイベントに支障を来すおそれが有るかもしれない。

○自分、医者のお薬を飲んでいきます。でも元気で木沢にいると思います。

○復興に関連すること、フレンドシップ木沢の事業計画に、二子山周辺と木沢集落にある共同車庫のシャッターアート（絵画）などに、フレンドシップ木沢、大学生など復興に多くの皆様のご支援をいただき完成させました。本当にありがとうございます。



長左工門

星野 総一郎

これからやります



震災から十年経った。

災害を他人事のように考えていたのが自分事になってしまった。何か落ち着かない、ふわふわしたような、現実では無いような気分でいた事を憶えている。

震災に遭い、その中で、人に助けられ、はげまされ、そして協力し合うという、普段では出来ない貴重な経験をした。

しかし、今の自分を見ると、その経験が生かされていない。どの元もかなり下に過ぎたせい、危機感などが薄れているようだ。気構えは必要だ。せめて、非常時の品物を揃える、というような事から始めたいと思う。

最後に、ボランティアの皆様、支えて下さった方に感謝します。ありがとうございました。

随想



あれから十年、もう十年、そしてつらかったA、B、Cとの別れ。出合いがあれば別れもある。出合いと別れは常に背中合せ：全壊の家もマツチ箱の様に小さ

い乍らも夫婦二人なら何とか住める家も出来た。これも全国の皆さんからの温かいご支援のお蔭と常に感謝している。多くの人達との横のつながり、絆も出来我儘いっぱいを受け止めてもらっている。しばらくして「やまぼうし」が始まった。どこでどうなったのか賄いを担当する事になった。献立、人数、品揃えと全く未知の世界の一つから始まった。身体が就いていかず、ストレス、疲れ眠れないと言った日々で「メニエール病」というのになった。現在も薬だけは継続中。とにかくチームワークが一番大切だと言う事を改めて感じた。お客様がおいしいと言って食べて下さる事が一番の励みになり作りがいもある。中には作り方を教えてとか、どうして保

存しておくとか色々だ。至福のひと時を感じる。ただ後を継いでくれる若い人達がないのが心配だ。今のメンバーでまあ余り先の事を考えずやれる所迄やるしかないと覚悟を決めている。愚痴を親身に聞いて下さる人がいるだけ自分は幸せだ。そして地区の皆さんからの山菜、野菜が一番嬉しい、とにかく新鮮だから、捨てる所がなく全部使わしてもらっている。あとは夫婦二人で無病息災で過ごせればこれに越した事はないし倅せに思う。

子ノ兵衛

星野達也

我が家の復興とこれからの木沢へ

東日本の大津波をテレビで見た時

十年前の中越大震災を

思い出してしまった 出来る事なら

思い出したいくないが!!

言葉に出来ない位こわかった

家の周り見る物すべてがこわれ

道はヒビが入っていた

愛犬の「ラン」はこわくてふるえているばかり

センターの前で二晩過ごした

空には星がすごくきれいに光っていたのを覚えている

やがては旧小学校体育館に村中の人達と一緒に二十五日程暮した

家に帰った時あたりこわれた家に心細い思いをした 冬の大雪は大変だった

そして寒い冬がすぎ

春が来て

家を直すため大工さ

んが来てくれた時は

「ホッ」とした 何と

か木沢の地で生きて

行けるとその時思っ

た



万平家持

星野光治

我が家の復興とこれからの木沢へ

我が家では、作業場兼物置が倒壊し住宅は傾きました。突然起こった震災は忘れられませんが、震災後に大変だったことは、作業場も家も合板を張り直さなければならなかったこと



です。一方で、屋内に散乱した家具の片づけに県外にいた息子たちが手伝いに来てくれとても助かりました。震災時に壊れてしまった田んぼもありましたが、残った田んぼのお米を収穫できたのは良い出来事でした。

震災から十年経ちますが、震災後、無我夢中で田んぼ・作業場・住いを直したことが

一番印象に残っています。また、震災時ボランティアで来てくれた方との交流が続いていて、毎年イベントのときに顔を見せに来てくれるのが嬉しいのです。

木沢は空気がおいしく景色も良く、天気の良い日が特に素晴らしく自慢できる場所です。これからは八十歳代の人たちが多くなっていくので、外に出た若い人たちにUターンで戻ってきてもらい子どもたちの声が聞こえるようになれば、木沢に活気が戻って来ると思います。

※この文章は、常葉大学の学生が本人に聞き取りを行ってまとめたものです。

震災から現在に至る



地震後、木沢の集落の件数は減ったけれど絆はさらに強まった。

あれから全国の方々から支援をいただき十年の月日が経ち、我が家では家屋は全壊でしたが何とか持ちこたえ頑張った。

「ありがとう我が家よ」四年前母が、そして今年四月に父が他界し今は三人で互いに体に気をつけて多くの人達に助けられながら頑張って暮らしています。あのような恐ろしい震災は孫達には体験してほしくないと心から願っています。

閉校した学校が今「やまぼうし」と言う名で民泊で甦り全国の皆様から利用していただいています。震災後、集落の軒数も減りさらに多くの方から来ていただき、木沢集落が益々賑やかになる事を願わずにはいられません。

前進

自然災害の中越地震から早十年と云う月日が過ぎ、長いようで去ってみれば短く感じます。あの時（十月二十三日）の事は、皆様も忘れる事が出来なんでしょう。

思い出したくもないでしょう。誰もが、そう思います。でも全国の皆様からの心暖かいご支援を頂き、復旧、復興と進み、今ではこうやって集落の人達と元気で、笑顔でいられる事が出来て、本当に有りがたく、うれしく思っています。自分なりに、毎日を感謝しながら、一歩ずつ前進していると確信しています。今迄の集落の戸数よりも半数になり、老人家庭も多く、若い人達にはご迷惑をおかけすることが多くあることと思いますが、自分なりの努力をし集落の皆様と一緒に幸せを作り、最高の集落にしたいと思っています。

宜しくお願い致します。



守ることが未来に繋がる

「みんな町へ出て、寂しいて。」

「寺はどこにもいきませんよ。」

これは、中越地震後多くの人が離村した地区のおばあちゃんとの寺の院代との会話である。おばあちゃんは、寺に來られた時、

「院代さんの言葉で安心したて。」
と、笑顔で話された。

里山だけでなく、平場の町でも若者が都会へと流れ寂しくなっている現象が多い。五十年後の木沢の集落の姿は想像できないのが現実だ。しかし、絆を強める集落の人々、温かい支援を惜しまない地区外の人たちが、木沢の豊かな自然を守り続けていくことが未来に繋がると思われている。



寺は檀家さんのご先祖をしっかりと

と守り、皆さんが安心して、日々を幸せに生きられるようにすることだと思っている。寺に務める者としては、寺を守ることが未来に繋がっていくと考える。

中越地震から十年。過ぎてしまえば、あつと言う間の感が強い。しかし、この十年には復興への知恵と多大な努力・協力が詰まっている。これらをバネに未来を創っていくことが大切である。

弥吉

渡辺 サチ

我が家の復興とこれからの木沢へ

私は木沢で生まれ、木沢とともに生活してきました。私にとって中越地震はとても大きな出来事でした。恐ろしい揺れに襲われ、とても怖い思いをし、家の修理にも時間がかかりました。そんな自分を支えてくれたのがこの木沢の人たちです。

幼い頃から共に暮らしてきた友人がこの土地には沢山いて、こうして地震のあともお茶を飲みながらおしゃべりできることが楽しく、そして幸せに感じています。このおしゃべりも、毎日みそ汁とご飯と漬け物を食べるように日常の一つにとけ込んでしまっていますが、一向に飽きのこない幸せな



て、もっとおしゃべりがしたいです。

地震で大変な思いをしたということに変わりはありませんが、震災前と変わらないこの場所で生活を続けられているのは私の中で木沢が一番の財産だと思っっているからなのかもしれません。

※この文章は、常葉大学の学生が本人に聞き取りを行ってまとめたものです。

忠吉 星野忠明

震災からの出来事

震災からもう十年 早いものです。

震災がなかったら逢う事のない人たちも多数いました。感

謝してもしきれない程お世話になりました。本当にありがとうございました。

さて、十年たって今思う事は今から三年前に平沢勝幸、阿部義夫、私と三人で震災であき家になった星野忠雄宅を改築してそば屋里山食堂をはじめた事です。週末しか営業出来なかったけど多数の人達がきてくれました。ニュースやチラシ



を見てきたと小千谷、三条、新潟など遠方からも場所がわからずやっと着いたという人もいました。

これが震災から大きく変った出来事だと思います。

峠

富蔵 星野広吉

十年振りかえって

あの大きな地震から十年目、長いような短いような。今ま

で経験した事のなかった大きな揺れだった。あの日まですかさかここ川口に大きな地震が起きるとは夢にも思わなかった。当時八十四才、多少元気があった。多少の養鯉業わずかばかりの畑それが一変した。遠い親戚よりも近くの他人といわれるが、村の人木沢人には本当にお世話になりました。この場を借りて改めて感謝したいと思います。



地震から十年たちますが今年の関東甲信の大雪、又三年前の東日本大震災大変な被害であった。毎日日本の何処かで大雨や、異常気象がさげばれるなか今までこんな事が起きた事はなかったという声がよく聞かれます。天災は忘れた頃やって来る、暑さも喉元過ぎれば忘れるという事のないよう日々気をつけたいと思います。

中越地震から十年身体も心も弱くなった。今年で九十四才、内のバサ(家内)も九十二才、二人揃ってよう長生きしたものだ。だが二人ともやっと歩いている。足が痛い腰が痛いなど毎日何処か痛いといっている。でもここ数年前まではわずかばかりの畑でとれる野菜を作るのが楽しみでもあった。今は子供の世話位なり食べるのが専門。歳のわりには二

人とも沢山食べるし若い者には負けない。それから私の他にあと兄弟三人いるが三人とも夫婦健在である(小千谷、山古志、それと横浜にと)。しかし皆身体にはガタがきているようだ。

ところで峠集落も三軒になっちまった。人も家も少なくなり限界集落だ。でも故郷はいい。冬大雪にならなければ天国、春の山菜、山の緑そしていい空気と 峠バンサイ

木沢バンザイだ。

乱筆乱文お許し下さい 終り

亀 三 星 野 勇

我が家の復興



震災当時は、この先どうなるのか不安でいっぱい、毎日毎日余震がくるたびに私達はパニックになり、毎日毎日なにかにおびえて大変でした。けど、一歩一

歩と復興に向かって行くまわりの姿を見てまたはげまされました。

私達は十年たった今、まだあの日の事は忘れる事はできないけど、少しずつではありますが、なんとか今は普通の生活が送れるようになり、子供の姿を見るたびに明るくなったなあと思う毎日です。

権平 星野寅吉

ふり返って！

もう十年、まだ十年とそんな気持ちです。あの時、「地震」は思ってもみませんでした。



家はつぶれて、住める状態ではなく、小屋にふとんを運び、

ナベ、カマはもちろ
ん、あのかたがった
家から、よくいろ
い運んだものと感心
します。

今でもこの小屋に
住んでいるのが不思議
です。

ふり返ってみれば、じいさんが元気で、何もかもやってくれる(?) おかげかナ「フフ」

この土地が、一番おちつきます。
どこに行っても、ここに帰ってくる

「ホッ」とします。いつまでも

ここにいられますように……

七十代のじいさんとばあさんです

木沢を離れた方

小山 星野キヨ(東川口在住)

あのおっかない地震から十年

日も暮れ落ちていましたが、私は玄関の所で、今年取れた里芋をかたづけしていました。さあてと戸締りでもして、風呂にでも入ろうかなと思った時に突然「ガラガラ、バーン」と壁はくずれ、玄関の戸は外にふっとびました。幸いにも戸が開いてくれたので無我夢中で外に出ました。

「かあちゃん、大丈夫だけ」と真っ先に長左エ門の長男総一郎さんが、声をかけながら私の家の方にかけて寄って来てくれました。一人暮らしをしている私の身を案じて長左エ門の長

砲平 星野邦子（富山県永見町在住）

男親子が来てくれた時は、とても心強いものでした。私の顔を見て額から血は出ているし、顔も紫色にはれているし、ひどく心配してくれました。とりあえず集落センターに行こうという事になり、長左エ門のかあちゃんと手をつないで集落センターまで坂道を上っていったのを覚えています。

集落センターに入って間もなく、またすごい地震が襲ってきました。ここもあぶない外に出よう。それから二日間は集落センターの前で野宿、着の身着のまま逃げてきたので布団を貸してもらったりと、近所の方の親切は本当にありがたいものでした。

それから雪が降る前までの間、廃校になった木沢小学校で避難生活が始まり、余震が続くなか、集落の人達にはげまされながら、全国の方に支援していただきながら、仮設住宅生活の木沢で二年、西川口に降りて一年続けました。

そして現在の川口の市営住宅に落ち着き、春から秋までは野菜作りを、黄色いバスに乗りながら今はもうない木沢の自宅跡に通っています。体が動くかぎり木沢の人達とのふれあいを楽しみにしながら今の生活を続けたいと思います。この今の生活が出来るのも、集落の方、全国の方に応援していただいたおかげです。

本当にありがとうございます。感謝申し上げます。

地震の時、長男の嫁のお腹にいた孫が小学三年生になりました。十年はずっと先のように感じていたのに、もう十年過ぎたのですね。

各地の災害を目にすると、自分達のあの時の事が、昨日のようによみがえってきます。“絶望しないで頑張つて”と思います。

木沢を離れて木沢の良さを感じます。一年に一・二回墓参りや、兄弟・姉妹に逢いに寄せてもらっています。春は山菜、秋は紅葉と長いスキの穂が、すがすがしい空気を感じさせてくれます。そしてなにより皆さんが、会えば以前と変らなない笑顔で迎えてくれる事です。本当にありがとうございます。

畑の作物やお米の美味しさは、こちらと比べものになりません。

私達も畑を借りて芋類やナス・キュウリなど、少しずつ作っています。でも、カラス、むじな、うさぎなどに荒らされてしまうので、全て網で囲まなければなりません。なのでスイカ、メロン、トウモロコシなど、おいしいものは作れません。木沢のカラスや獣より、少しどう猛なようです。

私達の住んでいる所は、車で五分も走れば海です。こちらの良い所は、朝取れの新鮮な魚を食べられる事です。今は、トビウオ、小アジなどの魚で季節を感じています。

私も夫も、仕事や職場の仲間に恵まれ、毎日張りをもって生活しています。言葉（方言）で不自由した母も今は週二回デイサービスに通い楽しく一日を過ごして来ます。孫のめんどうをみるつもりで来たのに、孫にいやされ、生きがいとなり、心のささえになってくれました。孫と一緒に過ごせる時間を与えてもらえたんだと前向きに考えて、これからも前を見つめて生きて行こうと思います。



常葉大学学生の皆さんから聞き取りにご協力いただきました。
大変ありがとうございました。



復興車座談議

平成26年8月9日
よるみ会館

参加者…星野福太郎 福

星野正良 正

星野総一郎 総

星野 勇 勇

星野 誠 誠

星野文江 文

間野光晴 間

司会進行…宮本 匠



宮 皆さんお疲れ様です。今日は、復興記念誌に載せる復興車座談議でお集まりいただきました。テーマは「集落の復興と未来に向けてのメッセージ」ということで、最初、震災から今までの十年間を振り返り、大変だったこと、つらかったこと、良かったこと、印象に残っていること、震災当時や震災前と変わったなというのを伺います。それから、これからの木沢・峠集落がどんなふうになって行ってほしいかお話いただき、最後に、十年後の木沢・峠集落へ向けて一言メッセージをお願ひしたいと思います。

日本の方に お世話になりました。

宮 最初に震災から今まで十年間の振り返りということ。どうですか、年の功で九六歳の福太郎さん。

宮 生きています。じゃあ、あと五十年くらいは。

正 いやあ赤字でもなんでも働けるうちはやらねば。やればやるほど赤字なんだけど動いている方が健康になるし。

宮 十年間で印象に残ってい

ることとか、どうですか文江さん。

文 うち瓦屋根が直ったのは震災から実に二年後でした。宮 それまでブルーシートがなんか張ってたんですか。文 直後に、床下にあった余った瓦を入れて、とりあえず雨が漏らないようにして。それでももう漏らなかったので、業者からすぐに来てもらえなかったんですよ。

宮 今日お集まりの皆さんはほぼ、お家が被害にあわれている方々なんですかね。文 何にも被害が無かったってことはないと思いますよ。あと、田んぼ、一割か二割負担で直したと思うんですけど、



多分自力復旧ならほとんどの人がやめてたと思いますよ。確かに田んぼは生きがいなんですけど、収入、利益が上がりませんと思うんですよ。だからそういう意味では、日本中の方のお世話になってありがたかったなあ。あと、地震前は知らなかった人が今通ってくれるじゃないですか、それは木沢にとっていろんな意味でプラスになってると思います。

宮 やっぱ福太郎さんみたいな人がいると、また行きたくないなあと思いますもんね。

文 そうですよ。

福 おれ地震の時はあれだったいや。家がおっ壊れてへえどうにもこうにもならんで。



ぼっこさんきやならんことになつてが、銭がいらんで町がみんな片づけてくれたで、あれ良かったたな。あれみんな個人が負担なんて言うの大変だったんが。

宮 そうですよ。いろんな再建にあたる支援が良かったですよ。

文 すごく感じましたよね。自分たち見捨てられてないんだな。本当に。

宮 お金だけでなくて。見捨てられてないっていう。ん、なるほど。

塩谷集落を見て、道の自力復旧を決断

正 まあ、十年振返って地震から忙しかったよの。

総 何がっらいとかなんか、そういうの忘れちゃったよ。

宮 忙しかったですか。

正 考えてる暇なかった。

文 いやあそれがあつたんだんが、割と悩まんできたんだねえか。

文 忙しいとほら、考えている時間がないから。

総 地震の次の日だっけ。道の修理とりかかったの。

文 三日目だよ。二日目に

どうするって。塩谷の人が次の日にへりで移送されるの見て、木沢の人もこのままでいたら同じ状態になるって。で、「道がどっけなってるか見てこいやっ」って言われて、孝さんとうちのお父さんが「ここはこうして直そうかねっ」って

言いながら武道窪の方まで。夏に雨が降って復旧工事の途中だったから、木沢の山に重機がいて、それを使わせてもらった。

誠 そう、道が崩れてる分運び出せないから、結局使ってくれてことになるからさ。

総 そのおかげで忙しかつて、悩む時間とか無かったからさ。

文 三日目の日から、男の



人は毎日朝ご飯食べてから、

「さあ道普請行こう」って言って、皆がさーっと出たのが、私すごい印象的。

正 どうせあそこで避難してても、仕事はないから暇だからさ。

総 それでやることはねえし。

誠 物資も来ないから、だったら自分たちで作って、とりあえず車が一台通れるようにしようって。

宮 あれって道とおってなかつたら、ぜんぜん状況違い

ますよね。

文 あの道作らなかつたら、本当に塩谷と同じ。あの道ができた次の朝、もう自衛隊の

ご飯が来たのが嬉しかったよね。お米がいっぱい要って、みんなの家から出てくるって

いつても、一年中のお米以外にそんなこの家も残しておかないですよ。今度誰がお米出すんだ」って言ったところに自衛隊のお米が来た

から、すごく嬉しかった。

福 井戸水がみんな絶えたん

だが、でも最初、十二ノ脇が三日くらい出てたがな。文 徳助の水もこんな、きつたない色だったけど生で飲まなきゃ大丈夫だからって言って、ご飯をたいたり、洗い物したりしたんですけど。それはそれで良かったなってすごく思うけど。

宮 体育館にはどれくらい居てはったんですか。

福 あれ一か月くらい。四日目から入ったんだよ。

文 仮設住宅が一月後半くらいにできた。

宮 家を直すまでの間はみなさん、どないしてはったんですか。

正 だいたい翌年から、直すのは。

文 直さないで住んでた、結局。

誠 補強はして、何とか住めるようにして。

正 木沢の人はここだが、良かったんだよ。ここだからすぐ雪堀できたよ。塩谷全部出ちゃったんだが。

福 本当にダメになった家って、そつげどうどなかったよの。

宮 そうですか。みなさんんだかんだ離れずにいれたというのは、よかったですね。福 でも集落の人まとまっていられたんは良かったんさ。あれがバラバラだつて、なじよになったかわからなかったがね。

地震で集落が変わった

正 地震がなければどうなっていたか。今いろんな人とこう付き合えるようになったし、外人さんから、教授から大学生から、自信がついての。

文 そうそうそう。多分(地震が)なかったら、そういう人たちが木沢に来ることはなかったと思います。

宮 いやどうなんですか。僕が大学生で来始めた最初、大阪の言葉じゃないですか。そういうよそもんがやってきて、あいつらなにしてくねんって思わなかったですか。

文 あのね。一緒に急にみんな暮らすじゃないですか、そうすると悪いところが目立つていうか。だけど他人が入ってくるって冷静になれて嬉しかった。だからボランティア



アの人が来て仕事を手伝ってもらおうというよりも空気がね、すごく有難かったです。はい。福 あれ持つてきてもらったときはよかったや。トイレ。宮 トイレ。狛江市からきた。福 女の人がそ、かわいそうだった。あれいつかくらいもいてから来た？ 割合早かったか。

文 次の日。だって、土曜日の日地震があって、日曜日役場に狛江市から仮設トイレが届いてた言っていましたもん。宮 (牛ヶ首の) 道路が落ちたところ、こうやってトイレ運んでる写真ありました。

福 早くてびっくりした。総 やつと人間が渡るぐらいだったんだね、あこ。

正 町政とかの悪口いうけど、ああいう震災のは早かったよの。道路も早かったし、田んぼや農地も割合早かったことつお。あれが、一年もほったらかしなら木沢の人みんな出たこてや。

宮 よう直りましたよね。

正 あれだこつてやの、みんな移転なんかでバラバラになるがそれでも残ったんだが



さあ。おらも行き場所もねえし、金もねえけどさ。

宮 あの幸一さんもこの前の聞き取りで、なんで幸一さん木沢に住んでいるのですかって聞かれて、いや金があればすぐにでも出たいとか、台無しにする話してましたよ。

正 いやでもほら、離れたくない人も離れた。この間、砲平の邦子さんが電話でそういったんだけどそ。

宮 村がなくなるかもみたいな。

正 未だにおふくろも見てる。あ、この家まだ電気つかんとかさ、なして暗くしてるんだろうかとかさ。

文 でも木沢の人ってそうやってほら、なにげによその家のこと見て、三日も電気つかなかったら非常事態になってるから行ってみようって、これってすごいなあって思いますよ。

宮 そう思いますよ。
文 たとえ急に病気で亡くなったとしても、一年も知らないでいます。なんてことはないから、そういうところは地域の繋がりがってすこ

いなって思います。

小学校がやまぼうしへ

宮 やまぼうしもこの十年で大きい変化ですよ。あの廃校になった小学校が宿泊施設にってのは、想像してたんですか。

総 いや全然思わなかったよね。

誠 するんだらうってのはあったけど、まさかあんななるとはね。

宮 地震直前でしょ。廃校になったの。

正 春（廃校）して、秋地震。ちょうど空いた年だった。だから木沢の人は運が良かったの。

宮 それこそ直後は避難できなし、今でもイベントがあるときは集まれるし。

総 学校やっていても避難所になつたらうけどね。

宮 でもこんな山の中って言ったらあれですけど、学校ありますよね。そんだけ人がおつたっていうことでもありませんか。

総 昔はね。
宮 ここに学校がないとあか

んくらい。

文 うちのお父さんがいた時、小学から中学三年生まで百七十人くらい。

子供の声ができる集落に

宮 ちよつと復興談義にもどりますか。これからの木沢・峠集落。どんな集落になつてほしいですかね。

福 おらみてんがなんか、へえ先がねえがなんだんが、なんのあれもねえどもに、これから家が減つてもらつっちゃ困るがだどもに。

宮 いや一番先がありそう。

正 あやかつての。

宮 そんなこと言いだして、もう二、三十年たつてるわけですよ。おらもう先がないとか。「先がない詐欺」。

正 そのうち世界長寿で一位くらいなるよ。

宮 福太郎さん、なんか夢とかないんですかね。

福 まああれだこつてやの、人の世話ならんでコロッと死まつてば、それだけさねえこつとお。

宮 朝げ起きてみたら、おい死んでたいやあ。が夢。まあ



でもそれは最高ですよ。文 それは最高だと思う。多分みなさんの夢だと思いますよ。

宮 福太郎さんがいなくなれば大ショックですよ。

福 そげつごたねえ。

宮 誠さん、どうなんです、一番若手として。

誠 やっぱ一番は嫁不足とかそんな感じだろうね。嫁来て、子どもじゃねえかなって思うけどさ。来たっていう嫁がいれば来てもらって、活性化してもらえればいいんじゃないかって。

文 子どもの声があるとなんか未来があるっていうか、活性化としてるっていうか。

誠 そうなのが全くないわけじゃん。親戚の子がきて騒いでる声ってのしか聞こえないからさ。

正 あれ何鳥だった、ほら、佐渡の上。

総 粟島か。

正 あれ有名だよ、留学。

誠 県外から呼んできて、一年だか二年住んで、そして卒業してっていう。

宮 そういうのもあれですよ、木沢・峠に子ども、もちろんおつたらいいでですけど、同時に留学系とかインターン生とかそういう形でもね。

正 あそこもほら、泊めるところがね、寄宿舎あるんだらうけど。今回（十日町市）池

谷もね始まつてるし。積極的だからさ。

宮 木沢もね、使える空き家があつたらね。

正 木沢は使える空き家はねえんだが、空き部屋はあるんだがどうぞって。

宮 それめっちゃいいキャッチコピーじゃないですか。「空き家はねえけど空き部屋あります！」

正 それ多分、上手くいけば定住になる。空き部屋で一年間住んで、親しくなって住もうかかっていう。

宮 木沢空き部屋プロジェクト。ちゃんと受け入れてくださいよ。

正 インターン生みたいに一年間対面して。

宮 イイじゃないですか。

間 やっぱりあれだよ、木沢のやまぼうしをね、ずっと集落の人が管理できるようにあればいいよ。あそこ外から人が来るから。

正 そう、やまぼうしさえ残ればと思うんだけど、これもまた後継ぎとかの問題がさ。

間 まあ最悪木沢の人じゃないけども、ずっとああいう形で



つながつていけば、誰かが来ると思うけど。

宮 木沢を目指してくれる方たちがいますもんね。あれがあるおかげで。

正 まあ八月はね。今満タンに入ってる、今日もお客さん入っているし。

宮 ちょっとした収入になるところでもありますし。例えばああいうのがあるから、ちょっと戻ってみようかなっていうせがれさんとかね。

間 あと一番はあれだよ。大学。大学生のみなさんがいっぱい来たっていうのが大きな。

宮 まあね、その人たちがまだ通ってるっていうのすごい

ですよ。

間 つながつてる。

正 今日の（常葉）大学とかだったて毎年先生が連れてきてるし。

宮 昔来ていった奴らがどんな家族が増えていった。

正 昔子供がいっぱいたころはのう、学校がなくなるなんてのは夢にも思わなかったの。

福 おらもそうなの、なくなると思わなかったの。

総 全国的に今は少子化。

宮 大体学校がなくなると急に村寂れるじゃないですか。ここの場合違う形であそこ（やまぼうし）が賑やかになつてる時間があるってこと

大事ですよ。

正 体育館や教室の電気ついてると、一つ明かりが増えるんだんがいいよ。

十年後の木沢・峠集落へ

宮 最後に十年後の木沢峠集落にむけて一言メッセージをお一人ずつ頂こうかなと。福太郎さん百六歳。いいですね。十年前と唯一変わってないのが福太郎さん。他のみなさんちよっと年取ってるんですけどね。こう順番にいきましょう。どうですか、なんか一言でいいんで文江さん。

文 自分が元気でいればいいなって。みなさんが元気でいなきゃだめなんですけど、とりあえず自分が元気でいなきゃだめだと。元気で百姓したいと思います。

宮 超いい言葉じゃないですか。正良さん。

正 おれもだんだん年取って、楽しいけどもにだんだん年取るね。総一郎さんも親がいながら一人で頑張ってるんだんが、おらも一人だどもに何とか頑張ばつてくこつお。

宮 総一郎さん。

総 まあそうだね、木沢も峠も軒数が少なくなっても何とか生きていけるろうから、頑張って暮らしてほしい。

宮 誠さん、いかがですか。言ったけど、軒数が減ってる人たちみんな頑張ってる人だよね。それでね、嫁がきて子供ができて、多少も増えてくれればいいかなと思ってるんだけど。おれも実際また出るかもしれない。でもいたらね、なんか嫁連れてきて、活性化には貢献したいなと思ってるけどね。

宮 勇さん。十年後、峠はおらつちばかになるかわからんけど。隣に木沢も塩谷もでつけえ集落があるんだんが、まあ峠はその真ん中だどもに、木沢がなくなっても峠があるように、頑張ろうかと思つて。

正 そうだよの、木沢が先だ。油断したら。木沢がなくなっても峠がね。

誠 一番若手がいるんだ、娘が。

宮 現実的ですよ。最後、

福太郎さん。

福 十年後になれば家の数はまあ多少減るども、ここにいた人は頑張ってもらって、長生きして裕福な暮らしをもらいたいこつお。

宮 ありがたい言葉を頂戴して。

間 宮本さん最後に。

宮 じゃ僕も十年後の木沢へ。人間寿命もありますから、亡くなられる方も前の日の夜までは自分のしたいことをやってきたら、おい、死んでたいやとなるように。そして元気な方は変わらず。木沢・峠も当然変わってる部分もあるんですけど、良いところが変わらないうでいてくれたらいいなと思いますし。十年後も僕も元気でまたここにやってきました。いなと思います。

総 今度は教授で来たりして。待つてるこつお。

福 嫁、子供連れてこいよ。

福 へえまだ結婚してねえが。してねえつすね。十年後は、じゃ期待してください。

今日は長時間になりましたけど、ありがとうございました。







震災から十年

これからの木沢・峠集落

へのメッセージ

長岡技術科学大学 教授 上村靖司

田植えから一ヶ月余の後、稲が根付いて伸び始めた頃、あえて水を止めて水田を干す。水を求めて稲はより地中深く根を伸ばす。茎の増え過ぎも防げるし、地中に酸素も供給される。稲からみれば、地面がひび割れるほどに干されるのだからたまったものではない。ここで死ぬわけにはいかないと水を求めて根を深く地中に伸ばし、倒伏しにくい強い稲となる。生命は「困難」を乗り越える



関西大学 教授 草郷 孝好

木沢は、誰もが幸福に生きるために欠かせない何かを肌で感じ取れる特別な場所になりつつある。木沢衆の幸福度は全国平均よりも高く、幸福度を左右す

ことでより強い生命となるのだ。

人の一生で一度や二度の困難は当たり前のこと。まして多世代で受け継いでいく地域の長い歴史では、幾度もの困難を乗り越えてきたことだろう。中越地震は神様が与えてくれた「困難」だった。困難に向き合い、乗り越えようと力を合わせて頑張ってきた十年であった。見た目にはわかりにくいかもしれないが、間違いなく根張りは良くなり、茎も太くたくましくなったはずだ。そしてしっかりと頭を垂れる金色の稲穂を実らせるだろう。大切に育てて刈り取って、はぎ掛けして天日干ししよう。できあがった籾は次の世代の種籾となる。次なる困難に立ち向かい、乗り越える力がその遺伝子に刻みこまれているはずだ。



る決め手には驚きを隠せない。木沢では、全国調査では最下位の「地域コミュニティの活力」が「健康、経済力、家族」と同様に上位に並ぶ。木沢流の幸福な生き方とは、集落の仲間や集落を訪れる人々を大切にすることなのだ。「木沢は都会とは違うから、集落内の助け合いが切実なんですよね」と言う人もいるけれど、この結果は、そういうことを意味しているのではないだろう。それは、震災後、関西からたくさんの方が木沢に足を運び、木沢から何を感じ取っているのか、を思い起こすと見えてくる。彼ら、彼女らは、積雪の厳しい冬、絶景の越後三山という雄大な自然の中で、人が本来持つ暖かさや困難に立ち向かう強さを、木沢衆から肌で感じ取る。そして、その後、何度も足を運び、社会人になっても木沢を忘れない。それは、地域の大切さを木沢から気づかされ、その関わりを自らずっと育てていきたいと感じるようになるからだと思う。木沢地区も、中越地震から十年の間、よりあいつこ、やまぼうし、手打ちそば、木沢焼、二十村郷の絆などの活動を通じ、新たな地域の個性を發揮しつつあるのがわかる。これからも、木沢衆の生き方と木沢地区の新たな魅力で多くの訪問者を包みこんでほしい。そして、この私も一人の木沢衆の友としてのおつき合いをお願いできればと思う。



公益社団法人 中越防災安全推進機構

阿部 巧・里奈

木沢に一度来た人は、例外なく木沢を大好きになって帰っていきます。そんな地域なかなかないですよ！ 私も初めて木沢に足を運んだ震災一周年の震災探索ハイキング以来、みなさんのおかげで楽しい毎日を過ごしています。また木沢を大好きになった人がいつも誰か来ているので、私も木沢に行けば、色んな人と会うことが出来ます。ものすごく多くの人にとって、木沢が大事な場所になったのだと思います。これからも木沢と一緒に楽しむ一員として遊びに行きたいと思えますので、よろしくお願いします！（巧）

初めてご挨拶させて頂いたのは二〇一二年の二十村郷盆踊り。気さくに話しかけて下さり、その親しさと明るさにすっかり木沢のファンになりました。それから様々な機会がありました。思い出深いのは盆踊りの太鼓です。熱心に教えて頂き、川口まつりや木沢の盆踊り、二十村郷盆踊りで叩かせて下さいました。盆踊りで結ばれ、盆踊りでうんと強くなった絆。これからも変わらず育ませて頂ければ嬉しいです。（里奈）



京都大学防災研究所

特定研究員 宮本 匠

木沢には、時が流れて変わるものと、やっぱり変わらないものがあると思います。どちらかというと、僕もその変わらないもの

のに惹かれて、木沢にまた行きたいなと思いますし、そのおかげで木沢で過ごす時間がとても満ち足りたもの感じられます。春の土の匂い、雪解け水の音、新緑のかがやき、

被災集落から伝説の集落へ



前長岡地域復興支援センター 川口サテライト

地域復興支援員 脇田 妙子

地域復興支援員として木沢にお邪魔するようになって、皆さんには数えきれないほどお世話になりました。愛知から移住したばかりで言葉も習慣も慣れないことばかり。支援をする仕事のはずが、多くのことを教えてもらいました。

特にフレンドシップ木沢のメンバーの方々とは、多くを話し合い共に事業を行ってきました。暑かった二子山遊歩道の整備。楽しかった防災キャンプ。何より大変だった

忙しく動き回る軽トラックとゆったり動く押し車、そして藤の花と桐の花。夏の道路の照り返しと対照的に涼しい居間でのむお茶、夏野菜、盆太鼓の練習と神社の明かり。秋の黄金の稲穂、残暑と一足早い冬の風、きのこごはん、紅葉。冬の銀世界、静謐、まきのはぜる音、スリッパなしでは冷たい学校の床。そして見かけると急にこころがあたたかい気持ちになって、くだらない冗談に笑ったり、はっとさせられる言葉に考えさせられたりする、木沢の〇〇さん（字数が限られていますので、この〇〇に全員の名前をいれてください）。木沢に出会えた縁に本当に感謝しています。

中越地震十年を祈念して



兵庫県西宮市 飯干 初子

「十年」言葉では長く感じられますが、現実にはもう十年が

来たのかと思われまます。と言うのも、あの忌わしい阪神淡路大震災で私自身が心も体もボロボロになってしまいました。脊椎の損傷で両下肢の麻痺、歩く事の出来ない、まして立つことも不可能な生涯車椅子の生活となり十九年の月日が流れているのに驚いております。

その間中越の人との交流があり木沢へのツアーが企画され私も参加させて頂きました。皆様の協力を得ながら

たのが冬会議。でも、この冬会議のおかげで皆さんの考えていることが少しずつ理解できるようになり、話し合いの大切さを今も痛感しています。自由で建設的な意見は木沢という集落をより魅力的にしていきたいです。

こうした活動が実って、木沢集落は魅力が一杯です。また、それを住んでいる皆さんが訪れた方々に語れることが何より素晴らしい。

震災後十年という節目を迎え、木沢集落はまた新しいステージに向かうのではないかと思っています。支援を頼るのではなく、頼られる集落へ。いろんな人々の目標になるような伝説の集落になってください。



常葉大学 社会環境学部

(元富士常葉大学 環境防災学部)

一同 (卒業生を含む)

震災三年目からお邪魔していただきますので、七年間お付き合い頂き本当にありがとうございます。木沢で学んだことを糧に巣

立っていった学生が延べ九十名近くに上っています。これからも木沢で学ぶ学生を是非受け入れてください。美しい棚田と錦鯉がいて雪深い山里の木沢でなければ経験できないこと、ここできしか会えないかけがえの無い人々、

片道八時間の旅でしたが、疲れも出さずただ感動でいっぱいでした。手作りの料理でのおもてなし、村の中を坂道にも関わらず一生懸命に案内して下さいました。それから木沢焼の体験。今でもその湯のみ大事に使っています。色々と企画をされ日々村興しの為努力を重ねていらっしやいます。自然豊かな木沢をしっかりと守って欲しいと心から願っております。

今私は、コーラス・カラオケたまに小物作り等をやっているが生かされている喜びを実感しております。

合掌

ここでしか学べないことが沢山あります。十年後には「木沢の卒業生」の同窓会をやりましょう。

木沢のおもいで

NPO法人おぢや元気プロジェクト

若林和枝

ある日、久々におぢや元気プロジェクトの事務局に、木沢の義夫(観音)さんと正利(木挽)さんが二人で訪ねてきてくれた。手には原稿用紙をもって「若林さん木沢で新しい本を出すから、一筆書いてくれ」と嬉しそう

名誉村民より

な笑顔。私も木沢の人達とは震災以来の長い付き合いで、思い出もいっぱいある。頭の中で整理しなければいけないのだ。何を書こうか、その中でも心に残っている思い出は、「里山再生よりみち大学」の冬の講座、北海道から気象協会の石本敬志さんとプロの山岳ガイドの今井晋さんを講師に呼び、木沢の純白の雪でイグルーを造って、翌日には賽ノ神づくり、賽ノ神を囲んで義夫さんが唄ってくれた「天神ばやし」の歌声が心に響いた。夜は木沢の廃校に宿泊して木沢の人達と交流会。学長の丸山暉彦先生は「かねっこおり」で作ったウイスキーロックに舌鼓を打っていた。それ以外の時も多くの時間を木沢で過

ごした。木沢の「よりあいつこ」では、地域のみなさんの温かなおもてなしに感激しました。また、夜遅くまで和雄さんの隠れ家で飲んだお酒や、木挽さん家の薪で燻った囲炉裏端で、みんなで尽きない夢を語りながら食べたウサギ汁と日本酒は美味しかった。観音さんのお宅にも幾度となく泊めていただき、朝夕となく美しい風景の中に身を置くと、木沢の人達の暖かい心に触れているように感じる。木沢の人々はこの地を誇りに思っている「こはいいだろう」「日本一の場所だから」そういうのは木挽さん。住んでいる人も日本一の気概を感じさせる木沢なのだ。これからも木沢のおもいではまだまだ続く…。



大阪大学OG 楠 愛
(旧姓長谷川)

遊びに行くといつも温かく迎えてくださる木沢のみなさんに感謝。

みなさんが大阪に来られた時、大学の門から入ってくるバスを見て「うわあ、ほん

まに来はった…!!

あの光景、忘れることができません。

大阪大学OG 久保恵理子

働きはじめてからはご無沙汰してしまい、なかなか遊びに行けていませんが、今でも、木沢や木沢の皆さんとつながっていると、思うことで元気になれます。これからも、いろいろな人を笑顔にさせる木沢パワー期待しています！ また飲みましょう！



長岡技術科学大学OB

川本 浩介

皆様いかがお過ごしですか？

いつも家族のようにあたたかく迎えてくださり、とてもうれしく思っております。

木沢が十年先もその先も良い意味で変わらず続いている事を切に願います。

私も木沢の魅力を広めるアンバサダーとして、協力していきたいと思えます。



挑戦し続けて

長岡技術科学大学OB

上野 敦

大阪大学OG

聡子
(旧姓黒田)

四メートル超の積雪時の雪掘

り、山菜の漬物の味、新潟銘酒の酒盛り……。「ボランティアと被災された方」という関係性ではなく、友人のように時を共有し、私たちの方が笑顔をいただき、感謝しております。木沢は「ふるさと」のように思える場所です。



長岡技術科学大学OB

武澤 潤

ボルナツの一員として木沢と出会ってから、キッズトライ

キャンプや二子山道普請など木沢衆の方々には多くの技術や元気をもらいました。この先いつまでも元気な木沢が続いて欲しいと思います！



岩手大学ボランティアコーディネーター

楡井 将真

木沢は本当に良いところですね。豊かな自然、おいしい食べ物、苦労はするけど大量な雪、そして何より、そこに住んでいる木沢の皆さん。私にとって木沢は今の自分をつくってくれた原点です。これからもそんな木沢でいてください。

集落の良さをどんどん発見し、新しいことに挑戦する木沢であり続けてください。

木沢が縁になり、夫婦になった私たちは、「ふるさと」を応援し続けます。



大阪大学OG 谷 香織

私にとって木沢は、日本で一番特別な場所です。木沢の皆様がそれぞれに持つ職人並みの経験や知識を、お茶やお酒を頂きながら、新鮮な季節の野菜を頂きながら、草刈りをしながら、太鼓を叩きながら、そり遊びをしながら：様々な形で伝えて頂き、木沢の文化を共有させて頂いたこと、思い出すだけで胸が熱くなります。十年後もきつと、優しく暖かい笑顔がいつばいの木沢でいてください。私もその一部でいたいです。



木沢のみなさんへ

上越教育大学OB

高橋 要

木沢と出会って四年目の二〇一三年春。それからの一年間を、木沢集落の住民の一人として過ごせたことを僕は誇りに思います。木沢でしか見ることのできない四季の景色の美しさ。村に溢れる人びとの温かさ。それらに囲まれて濃密な時間を過ごすなかで、木沢は僕にとって



常葉大学教授 池田浩敬

震災三年目からお邪魔していただきますので、七年間お付き合い頂き本当にありがとうございます。木沢で学んだことを糧に巣立っていった学生が延べ九十名近く上っています。十年後には「木沢の卒業生」の同窓会をやりましょう。



常葉大学OG 柳原幸子

【木沢】とは

美しい景観や山の幸に恵まれ、温かい人柄の人々が住む日本の集落。この集落の人々は、驚異的な身体能力、技術、知恵を兼ね備えており、血液の九〇％は日本酒であると言われている。

【柳原幸子】とは

木沢と星野伸一を愛してやまない名誉村民の一人。日々、様々な伝説を残し続けているらしい。(写真わんこそば百杯を食した柳原)

もうひとつの帰る場所となりました。たくさんの愛とぬくもりを、ありがとうございます。

僕にとってだけじゃなく、木沢はきつと全ての人がとにとってのまだ見ぬふるさとだと思います。このかけがえないふるさとがいつまでも続いていくこと、木沢という一本の縄がいつまでも美しく縋われ続けていくことを心から祈っています。

また近々、帰ります。



常業大学OG 山本桃子

二〇〇四年の中越地震からもう十年が経過。復旧・復興するまでにつらいことや楽しいこと：数え切れないほどあったと思います。でも私がそちらに被災

地研修で訪れた際、みなさんに出会い、私のほうが元氣付けられました。笑顔が絶えず、居心地がよく、第二のふるさとのようです。被災当初と今とは景色など変化したことが多々あると思います。しかし、みなさんは変化しないでください！「みんなの帰る場所はここ！」と胸を張って今後も生活してください。

行こうと思いつつも、なかなか行くことができません、す



大阪大学OG 高森順子

木沢のみなさま、かまくらで「高森家」を作ってください。たこと覚えていらつしやいますか？ 早朝の澄んだ空気、ふき味噌とご飯の美味しい朝食：私の大切な宝物です。これからも木沢で、神戸で、お会いしたいです。



関西大学OG 山中智恵

約1ヶ月、木沢での生活を体験し本当に多くの方々と交流があることを知りました。中越地震をきっかけにさまざま「つながり」が生まれた木沢。

最後に木沢を訪れてから長い月日が経ちますが、私にとってこれからもずっと大切な場所です。

みません…。やまぼうしから見る景色が私は大好きです。食べ物、お酒、温泉：思い出がたくさんです。体調に気を付けて、絆を大切に、今後のご活躍に期待しています。



長岡大学OB 松沢知生

十年前の中越地震の時、高校生だった私は何も出来ませんでした。
しかし、現在は見事に復興して以前の活気を取り戻してきています。
十年後は今よりも活気付いていることを期待しています！

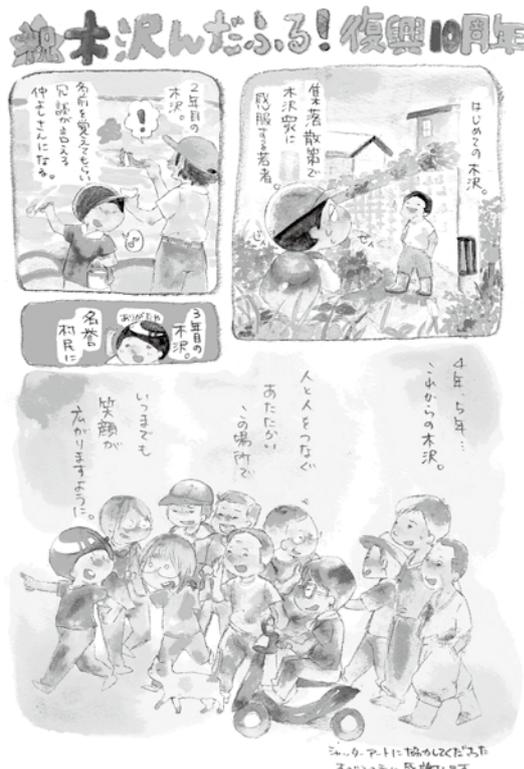


新潟工科大学OG 小嶋かおり

学生時代、木沢は第二の学校で、その後は第二の故郷になりました。
木沢衆のエネルギーは、これからもそんな人との出会いを沢山生むと思います。
そして、離れていても木沢を想う人が増えていくこと
でしょう！そんな祈りと感謝をこめて。



長岡大学四年 小倉美樹



長岡大学OG 小嶋さやか

今、遠くにいても、季節を思うとき、木沢の自然と、木沢衆の笑顔が浮かび、元気をもらっています。
パワフルな木沢衆に負けないくらい、私も元気をもらっています。

新潟工科大学OB

大川 慎吾



木沢の豪快でパワフルな皆さんと活動し、楽しくお酒が飲めたことは一生の思い出です。「誰もが分け隔てなく一緒に楽しい時間を過ごすことができる。」木沢はいつまでもそんなすてきな集落であり続けてほしいです。

新潟工科大学OB

鷺尾 雄紀



木沢では、多くのイベントに参加しました。すべてのイベントで、『無心で遊ぶ』事が出来ました。木沢の人々、土地の雰囲気、何よりも木沢衆の温かさ…どれか、ひとつでも欠けたら出来なかったと思います。

また、自分自身にとって、忘れられない体験ができました。

十年後、集落の高齢化が進むと思いますが…変わらずに学生を受け入れてあげて下さい。そして、学生と一緒に楽しんでください。

て、また木沢に遊びに行きます。

新潟大学四年 桑原 咲子



十年後も、元気な木沢でありますように願っています。

と同時に、十年前のことを、十年後も忘れずにいたいと思います。

私が知っている木沢は、まだほんの三年に過ぎませんが、名誉村民に選んでいただいたからには、これから五年、十年、二十年とずっと木沢と関わっていききたいと思っていますので、どうか末長くよろしくお願い致します!!

新潟大学OB 中澤 晃



木沢集落は美しい景色と人情の集落だと思います。二子山から見た絶景は鮮明に覚えています。また、交流を通して

集落の方々の優しさ、あたたかさを感じました。十年後も美しい景色と人のあたたかさに溢れる木沢集落でいてほしいと思っています。

童心に帰り雪国体験

ベトナム人留学生
川口住民らと交流



雪国の生活を体験して
もらい交流を深めようと
川口町木沢でのほど、
ベトナム人留学生が雪遊
びもあつつき、そば打ち
なをして、住民と楽し
い時間を過ごした。

木沢を訪れたのはベトナムのホーチミン市、
工科大の学生で、4月
から長岡技術大に編入す
る留学生14人と、既に同
月の中旬に来日したほか
16人。地元地域おこ
し団体「フレンドシップ
木沢」が主催し、住民や
同出身の大学生が交流
し、

「雪を見るのも触るのも
初めてという留学生たち
は、歓声を上げながら雪
合戦や雪だるま作りが熱
中。もちつきでは慣れな
いきね手を臼をつき
てきたのもちをおなか
いっぱい味わった。

「2」は「もちつきは難
しくはなかったけど力
がいる。初めて食べた
もちは柔らかくておい
しかった」と満足すだ
た。

フレンドシップ木沢
過疎高齢化が進む中山間地にある
集落を活性化させて、2000
年に活動が始まった。当初は地区の
役員が主体になり、町会などを行っ
ていた。
転機となったのは04年の中越地
震。震源地に近い木沢は多くの住宅
が全壊するなど壊滅的な被害を受け

過疎集落に交流生む

イベントは、都市部に住む住民
や親子連れ、大学生を県内外から
世代を超えて多くのかき集、さび
れていた集落に、子どもたちの歓声
も戻ってきた。最野さんは、交流を
進めることで、地域が元気になるこ
とを、今回の受賞も動機になると
手応えを感じている。



防災体験キャンプでの夕食会。県内
外から多くの人が参加し交流が盛ん
10月24日、川口町木沢
た。転出も進み、過疎高齢化が加速
した。
「これまでと同じ地区の役員がメ
ンバーでは負担が大きい。動ける人
が集まって活動していこう。代表
の最野秀雄さん(69)らが名乗りを上
げ、地震後に約20人で団体を再編成
した。冬場は週1回のペースで編成
を聞き年間スケジュールを細かく検
討。雪の山菜ソテーや、地域の教頭を
疑似体験する防災体験す
るフレンドシップ
キャンプな
どを企画し集落に人を呼び込んでき
た。

新潟日報 「県自治活動賞受賞」
平成21年11月4日付

汗流し住民と交流

中越地震の教訓を地慣れない作業に苦勞し
域おこしにつなげよう ながらも、草を刈り、
と、川口町の木沢集落 士をならして遊歩道整
で行われている防災キ 備に励んだ。
キャンプ。これは地震 日没後、廃校になっ
から5年の翌日、当た 木沢小学校の体育館
る10月24日、県内外か に、地元住民やボラン
ら参加した親子連れや ティーラ約100人が

交流事業を企画し、外 子ともの声を聞くた
から人を呼び込むこと けて元気が出る「お
で地域の活性化を図っ かけで生活に張りが出
ている。 ってきた。地域のお年
者の歓声が響き渡る。 だ。

キャンプの日は、過 寄りたちの表情にも
疎が進む集落に参加 自然と笑みが浮かん
た。

防災 キャンプ

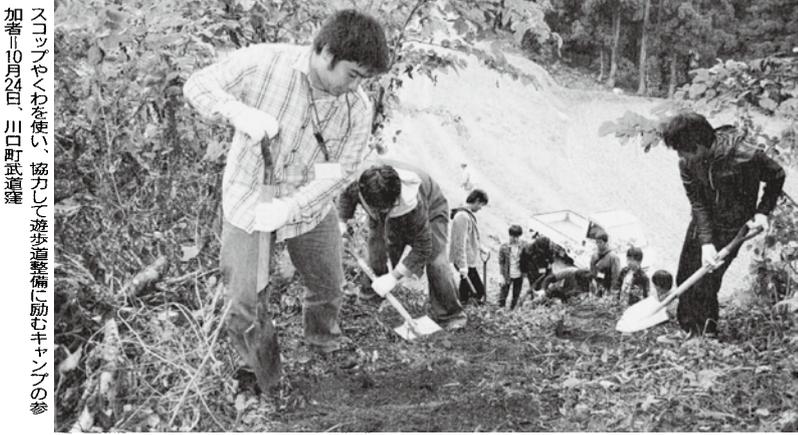
川口町木沢

学生が、まき拾いや食 集まった。夕飯は、み
材の調達で、地震で崩 んなでカレイライス
れた山の遊歩道整備に を作った。大盛りを平
汗を流し、住民と交流 らげるともたち。大
した。 人たちも会話が弾ん
ぶ。

「くわはあまり使っ だ。
たことがないし、道造 同業者は地震で転出
りかどだけ大変か分 が進み、世帯数は地震
かった。参加した宇 前の32から40に減少し
都宮市の会社員・野敷 た、地元住民団体フ
さん(26)は、山中の レッドシブ木沢」は



手分けして集めたまきをグラウンドの一角に集め
るキャンプの参加者=10月24日、川口町木沢



スコップやくわを使い、協力して遊歩道整備に励むキャンプの参
加者=10月24日、川口町武道達

新潟日報
平成21年12月7日付

料理や踊りで

体験交流センター

オープン祝う

新潟日報
平成22年5月1日付

長岡市川口木沢の旧「フレンドシップ木沢小学校」を改装した体験交流センター「やまほろし」のグランドオープン記念式典が29日、同所で開かれ、取れたての山菜料理を囲み、音楽や踊りで完成を祝った。

中越地震で過疎化が進んだ木沢の地域にお



踊りや三味線の演奏が式典を盛り上げた＝29日

「やまほろし」は調理したベトナム留学生のほ、自分も遊びに来たい、研修などに使われてい

木沢出身で長岡市の越

うし、OPEN(8)9

新潟日報
平成22年5月1日付

絆生かして

震源地川口の模索

<1>



変化

今年も積雪は3桁を越すをはじめ、山菜採りツアー。首都圏などの会社1、防災キャンプなど。肩や学生が屋根の上で傾き折々のイベントを催さないシャベルを振るし、首都圏や関西、但馬う。「雪庇は落ちやすい。岡市内から人を呼び込まずけ、気をつける。地む。木沢を元気にした元からの男性が笑顔でアパ

2月に長岡市川口地域の木沢集落で開かれた「雪かき道場」参加者は、地域おこし団体「フレンドシップ木沢」の星野秀雄さん(70)と雪下ろしに挑んだ。

交流施設運営に奮闘

都市部の活気ムラを刺激

2004年10月の中越地震で、史初めて地震計が震度を記録した震源地・長岡市川口地域。ほとんどの家屋が損壊し、山間集落の過疎高齢化に拍車がかかった。疲弊した地域は、外部との交流に訪れを見いだした。ボランティアなどの縁をかし、行事を積極的に仕掛け、人を呼び込んだ。しかし年月ととも

2004年10月の中越地震で、史初めて地震計が震度を記録した震源地・長岡市川口地域。ほとんどの家屋が損壊し、山間集落の過疎高齢化に拍車がかかった。疲弊した地域は、外部との交流に訪れを見いだした。ボランティアなどの縁をかし、行事を積極的に仕掛け、人を呼び込んだ。しかし年月とともに周囲の関心は薄れ、住民にイベント疲れも見え、そんな中、局地的だった交流を地域全体の活性化につなげようとした動きも生れる。災害はなおも世界各地で起こり、復興は通の課題。中越地震「ふるさと再生」第3部は、川口の取り組みを掲げ、

「雪かき道場」参加者との交流会で中越地震の体験を語る星野秀雄さん(70)と長岡市川口木沢の「やまほろし」

指定管理者になり、地元の主婦らが料理を出す。その一人、小林美知江さん(62)は、「山菜料理をおいしいといってもらえるのが一番うれしい。今は町場でパートをしているが、お客さんが増えたら、この仕事一本でやりたい」と期待する。

昨年1月までの利用者は日帰りも含めて約800人。しかし12月は利用者がゼロ。いかに安定した運営ができるかが大きな課題だ。経営のノウハウが回らなかった。中越ウがなかったため、失敗も多発。当初は部屋にお茶道具を置くような配慮もできなかった。

10年春には、県中越地震復興基金の助成で、震災復興基金の助成で、旧小学校を改装した宿泊交流施設「やまほろし」が正式オープンした。

フレンドシップ木沢がとをやっている



交流会で中越地震の体験を語る星野秀雄さん(70)と長岡市川口木沢の「やまほろし」

新潟日報
平成23年3月6日付

ごつつお堪能絆深め

被災者招き多世代交流会

川口

中山間地の高齢者と長岡市中心部の若い親子が一緒に楽しむ「多世代交流会in木沢」が7日、川口木沢の体験交流センター「やまほろし」で開かれた。今回は福島県内の仮設住宅で暮らす東

本大震災の被災者も招き、川口地域の郷土料理を味わい、地域差能などの出し物を鑑賞した。地元住民グループの木沢棚田保全連絡協議会と長岡市のNPO法人多世代交流館にな

が主催。幼児からお年寄りまで約140人が参加した。福島からは、東京電力福島第1原発事故で郡山市に避難している富岡町、川内村の女性農業者ら約20人が訪れた。

交流会はセンター敷地内のクラウンドで開く予定だったが、あいにくの雨で屋内に。「山野ご

つお会食」と銘打った屋食会では、キノコのおにぎりや山菜の煮物、地元産の米を使った米粉ジヤなどがずらり。参加者は住んでいる場所や世代を超えた交流を楽しんでいた。

娘と孫の3人で訪れた川内村の農業、猪狩真理子さん(57)は「孫を外で思いきり遊ばせたかったのですが、雨で残念です。でも、こちらで田んぼや畑を見て、ホッとした気持ちになりました」と話した。

▶新潟日報 平成24年7月11日付



幅広い世代の参加者が手作りの郷土料理を楽しんだ「多世代交流会in木沢」7日、長岡市川口木沢

長岡・川口 木沢集落住民生活実感

「幸せの国」と呼ばれるフータンを研究している関西大学の草郷孝好教授(49)がこのほど、2004年の中越地震で被災した長岡市川口の木沢集落を訪れ、住民の幸福度はフータンより木沢の方が高い」とする生活実感調査の結果を住民に発表した。「地域との絆や豊かな自然を大切にしていることが大きな要因」と分析している。

幸福度フータンより高

フータンでは国民総生産 その結果、各項目を総合よりも国民の幸福度(国民生活満足度)が10点満点中7.7点(幸福度)を重視。草郷教授は「フータンで調査したフータンでの調査より0.2点高かった。木沢集落の住民は家族や地域との関係、住民の健康や地域との人間関係など11項目について住民を大切なものと位置付けているほか、自然が豊かな地

「絆、豊かな自然要因」

域への愛着が強く、それらが幸福度を押し上げた。草郷教授は「何が幸せかを問う掛ける結果」と指摘。地域おこし団体「フレンドシップ木沢」の星野秀雄さん(70)は「我々が大切にしてきたことが評価されたようであらう。結果を励みに、みんなで頑張っていきたい」と話している。木沢集落は中越地震で住宅の9割が全半壊。世帯数は震災前の55から37に減り、過疎高齢化が進むが、都市住民との交流などに取り組んでいる。

◀新潟日報 平成23年7月19日付

思いつないだ一日

「10・23」は雨の中、犠牲者への鎮魂と、東日本大震災からの復興を祈る日になった。中越地震から7年。たすき代わりの黄色の旗で住民同士がつながりを再確認したりレーマラソン、復興を遂げることでできた感謝の気持ちがかもった子どもたちの歌声、絆の深さを確かめ合ったキャンドルの点灯。長岡市や小千谷市に新たに設置された6カ所のメモリアル拠点には市民が次々と訪れ、復興に向けて歩んできた日々を見つめて直した。子どもたちが夜空に放った白い風船には、東日本大震災の被災者と思いを重ねて復興を祈る中越の人々の願いが込められた。

「10.23」 中越地震7年



川口

白髪のお年寄りも、地震を知らない子どもも走った。住民約300人が黄色い大旗をリレーし、心をつないだ。長岡市川口地域で初めて開かれた「さすなマラソン大作戦」旗には「広

げよう ありがとうの絆」のメッセージ。震災の記録を伝えるため23日に同市川口中山にオープンした「川口さすな旗」を先着順にして、震源地に近い木津集落や、自らの住家が全壊した田麦山地区など36ヶ所をつなぎ、地域を一周した。連日強風が地域の絆の力を東日本大震災の被災地にも届けようとする。23日午前7時30分前

▲新潟日報
平成23年10月24日付

長岡・木沢集落

雪かきコツ指南

安全で的確な除雪作業を継続してきただけで、日積月累で雪かきを繰り返した長岡市川口地域の木沢集落で開かれた、前編から引き続き、作業中の注意事項やスコップなどの正しい使い方などを、



「道場」に県内外から25人 道具の使い方学ぶ

生協が主催した。参加者は、雪かき作業には必要不可欠な雪かきコツを学ぶ。その際、田舎小学校のボランティアで指導した。雪かきコツを学ぶ。その際、田舎小学校のボランティアで指導した。雪かきコツを学ぶ。その際、田舎小学校のボランティアで指導した。

ほとんどの人が初めての体験で、雪かき作業に慣れず、汗を流しながら作業に励んでいました。長岡市川口木沢集落

除雪ボランティア養成を目的に、NPO法人中越防災ボランティアと地域福祉センターが主催した。雪かきコツを学ぶ。その際、田舎小学校のボランティアで指導した。

▲新潟日報
平成24年2月12日付

◀新潟日報
平成25年8月14日付

2011年から制作が続いてきた、長岡市川口木沢集落の四季を描いたシャッターアートが集落内に完成した。同市の長岡大の学生らが集落の人たちとの交流を深めながら、田植えや盆踊りなど、自然や習俗を取材して描いた。先週、最後に残っていた秋の風景が出来上がり、みんな喜んで喜んだ。

シャッター彩る春夏秋冬

川口木沢学生2年かけ完成
7日まで4日間行われた作業には、新潟大の学生も含め、毎日15人ほどが参加した。完成したシャッターアートは、集落の人たちの旺盛な行動力にパワーをもらって、これからの交流を続けることになった。



木沢集落の秋の風景を仕上げた。長岡大の学生や集落の人たち、長岡市川口木沢

素晴らしさを伝える作品に仕上げた。大切にしたいと目を細めた。デザインを担当した長岡大の3年の小倉美樹さん(20)は、「集落の人たちの旺盛な行動力にパワーをもらって、これからの交流を続けることになった。」と笑顔で話した。

身近な「宝」地域に活気

復興集落の歩み

< 3 >

外部と交流通じ再発見



山梨など、集落の四季に住民たちの姿を添え、交流体験施設やまほろし(2)で再発見した。地産地消を推進し、集落内外をつなぐ機会を創出する。住民有志が声を上げ、多くのボランティアが活躍している。元会長は「自分たちが活躍の場を確保した。山梨の山間集落と通じたい。学生たちは住民と交流する機会が広がった。外の人から集落のよさを伝えたい。山梨の集落に力をつけてほしい。山梨の集落に力をつけてほしい。山梨の集落に力をつけてほしい。」

越後三山や魚野川を見渡せる「やまぼろし」で、協議する「フレンドシップ木沢」のメンバー。21日、長岡市川口木沢

▶新潟日報
平成26年9月26日付

新潟県中越大震災発生後からの軌跡

平成16年	
10・23	<ul style="list-style-type: none"> 17時56分 中越地震発生（震度階級7、マグニチュード6.8）
10・25	<ul style="list-style-type: none"> 19時30分 集会所前で多数避難（24日まで） 住宅の下敷きにより一名が犠牲となる 旧木沢小学校へ避難場所を移動 武道窪へ通じる県道の自力復旧スタート（午後から作業開始） 町からの炊き出し始まる 8時30分 狛江市が持参した仮設トイレ二基が搬送され組立設置される 13時20分 峠地区に避難指示（三世帯、一六人） 避難所用のゴザが運ばれる ボランティア活動が始まる 避難所用テント二基設置される 電気の復旧 11・4 11・8 11・10 11・11 11・14 11・16
	<ul style="list-style-type: none"> 10時30分 家屋被害調査実施（11月4日～） 川口小学校で授業再開。木沢から通学（11日から自衛隊車両で送迎） 10時30分 泉田新潟県知事現地視察 木沢集落へも訪れる タレント清水国明さん来訪 10時30分 木沢水道復旧 旧木沢小学校避難所へ仮設風呂設置（練馬区） 14時00分 木沢地区避難勧告解除 8～9割自宅へ

平成18年	平成17年	平成16年
5・25	12・2	11・19
4月	12・3	11・20
2・11	1・1	11・21
1・27	2・3	
12・11	2・12	
12・7	2・18	
10・22	2・20	
10・23	4・24	
9・21	6・12	
8・19	8・19	
6・12	9・21	
4・24	8・12	
2・20	6・12	
2・18	4・24	
2・12	2・20	
2・3	2・18	
1・1	2・12	
12・2	2・3	
12・1	1・1	
11・30	12・2	
11・21	12・1	
11・20	11・30	
11・19	11・21	

- 牛ヶ首經由県道開通
- 仮設住宅建設開始
- 木沢で罹災証明発行
- 自衛隊による演奏会開催
- 木沢・峠地区の住宅応急修理、生活再建支援等相談窓口開設
- 峠地区の避難指示解除（三世帯・一六人）
- 仮設住宅の入居開始
- 合同年始中止（地震災害の為）
- 初午 大雪で中止
- 十二講 大雪で中止
- タレント杉良太郎さん・歌手伍代夏子さん 震災見舞で来訪
- 復興まつり「がんばろう木沢」
- 大震災復興支援「春の民謡まつり」（体育館）
- 復興祈念「運動会」開催
- 中越地震慰問公演 松田隆行（津軽三味線奏者）コンサート
- 狛江市民との「よりあいつこ」開催
- '05かわぐち体験防災キャンプ
- 本震震源探索ハイキング地区参加
- 第一回「復興地域づくり」懇談会
- 震災復興祈念「よりあいつこ」開催
- 第二回「復興地域づくり」懇談会
- 雪灯り回廊や雪灯りアートで希望の灯りを点灯
- 本格的な道路復旧始まる（4月～12月）
- 学生ボランティアとの交流畑づくり（5月25日～11月末まで）

平成19年										平成18年													
10・19	10・14	9・14	9・7	9・2	9・1	8・5	8・2	8・1	5・27	4・7	3・25	2・18	2・14	12・23	12・10	10・29	10・15	10・11	9・15	8・24	8・20	7・17	6・17
<ul style="list-style-type: none"> ・「07かわぐち体験防災キャンプ」 ・「キッズ・トライ・キャンプ」 ・「狐江市の市長と議会の方が木沢を訪問」 										<ul style="list-style-type: none"> ・「視察研修」長岡市法末集落（空校舎の活用） ・まち歩き「木沢探検ウォーク」 ・二子山遊歩道自力復旧作業 ・「木沢いいとこどりマップ」の作成（8月24日～11月20日） ・県地域づくり研修ツアーでの昼食提供 ・NHKラジオ「80ちゃん」木沢で収録 ・'06かわぐち体験防災キャンプ ・「キッズ・トライ・キャンプ」受け入れ ・「運動会」開催 ・木沢・峠集落「復興祭」開催 ・震災で水源が枯渇、木沢簡易水道を中央簡易水道に統合 ・女性お茶のみ座談会 ・「中越復興交流会議」への参加（長岡市） ・豆おとしの会 ・第二回「集落夢づくり交流会」参加（和南津集会所） ・長岡子育てライン「三尺玉ネット」交流打ち合わせ ・長岡子育てライン「三尺玉ネット」との交流 ・「畑づくりツアー」開催 ・桜華女学院中学校の自然体験学習（8月1日～3日） ・富士常葉大学、視察で集落を来訪 ・二子山遊歩道の自立復旧作業（全線開通） ・第二回「地域復興交流会議」へ参加（中山・杜のかたらい） ・上越市安塚区坊金集落・細野集落を視察研修 ・狛江市との「よりあいつこ」に参加（中山・遊亀庵） ・長岡技術科学大学の学園祭「技大祭」に参加 													

平成21年										平成20年													
1・8	12・17	11・29	11・30	11・29	11・17	11・9	11・2	10・24	10・23	9・13	8・24	8・12	8・11	7・23	7・21	7・8	7・5	7・1	6・4	6・1			6・1
<ul style="list-style-type: none"> ・「第一回冬会議」（以降三月まで週に一回程度開催） ・「二ナ餅つき交流」（二ナ交流施設） 										<ul style="list-style-type: none"> ・「視察研修（小国町法末集落・森光集落、小千谷市若栲集落）」 ・二十村郷集落交流会 ・打合せ（第一回目・よろみ） ・視察研修（お母さんたち・小国町法末集落） ・地藏菩薩お堂へ安置 ・地藏菩薩開眼祭 ・二十村郷集落交流会（現やまぼうし体育館） ・農家民泊受け入れ（東京都江戸川区立葛西第二中学校） ・防災体験キャンプ（狛江市と川口町の子供たちが参加） ・第一回二十村郷盆踊り開催（雨のため現やまぼうし体育館） ・長岡技術科学大学学園祭「技大祭」に参加 ・兵庫県西宮市復興住宅入居者の皆さんとの交流 ・木沢よりあいつこ（旧木沢小学校） ・第四回集落夢づくり交流会参加（田麦山集落） ・「二ナ郷土料理教室」（二ナ交流施設） ・中越復興交流会議参加（六日町） ・立川市で震災米の販売 													

9・19	8・28	8・23 8・21	8・9 8・8	8・4	6・20	4・29	4・26	4・18 4・17	3・30 3・17	3・13	2・16	2・13 2・11	1・19	1・15 1・14	1・9
<ul style="list-style-type: none"> ・長岡技術科学大学学園祭「技大祭」に参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・第三回二十村郷盆踊り開催(荒谷集落) 	<ul style="list-style-type: none"> ・中越学生研究会「わかば会」サマーセミナー(やまぼうし宿泊) 	<ul style="list-style-type: none"> ・富士常葉大研修(やまぼうし宿泊) 	<ul style="list-style-type: none"> ・わら細工体験 ・ドイツ人14名がわら細工に挑戦 	<ul style="list-style-type: none"> ・視察研修(上越市・環境学校) 	<ul style="list-style-type: none"> ・やまぼうしグラウンドオープン記念式典・祝賀会 	<ul style="list-style-type: none"> ・第二回山菜満喫ツアー 	<ul style="list-style-type: none"> ・視察研修(村上市・交流の館「八幡」&食堂「RORR」) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナムホーチミン市工科大学長岡技術科学大学入学直前研修(やまぼうしへ宿泊) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第二回名誉村民授与交流会開催(よろみ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・屋号看板完成。各戸への取り付け作業実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・越後雪かき道場(やまぼうし他) 	<ul style="list-style-type: none"> ・屋号看板作業(以降2月5日・9日に実施) 	<ul style="list-style-type: none"> ・西宮交流が大雪により中止(幹線道路が通行止めによる) 	<ul style="list-style-type: none"> ・にな二ナ餅つき交流(にな二ナ交流施設)



3・11	3・10	2・18 2・17	2・12 2・11	1・25	12・18 12・17	11・13	11・9	10・22	10・16 10・15	10・10 10・7	9・15 9・11	9・7	8・27	8・26 8・23	8・22 8・21
<ul style="list-style-type: none"> ・第七回集落夢づくり交流会参加(ホテルサンローラ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第四回名誉村民授与交流会(よろみ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・中越学生研究会「わかば会」ウィーターセミナー(やまぼうし) 	<ul style="list-style-type: none"> ・越後雪かき道場(やまぼうし) 	<ul style="list-style-type: none"> ・にな二ナ餅つき交流(にな二ナ交流施設) 	<ul style="list-style-type: none"> ・関西大学草郷ゼミ合宿in木沢(やまぼうし) 	<ul style="list-style-type: none"> ・木沢よりあいつこ(やまぼうし) 	<ul style="list-style-type: none"> ・にな二ナあんぼづくり交流(にな二ナ交流施設) 	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟大学「新大祭」参加(三回目・新潟市) 	<ul style="list-style-type: none"> ・木沢流防災体験塾開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際自然環境アウトドア専門学校によるエコツアープログラムづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・シャッターアート制作(木沢の四季・夏) 	<ul style="list-style-type: none"> ・シャッターアート制作開始。絵の投映テスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・第四回二十村郷盆踊り開催(山古志・梶金集落) 	<ul style="list-style-type: none"> ・シャッターアート制作のため木沢学を実施(長岡大学他参加) 	<ul style="list-style-type: none"> ・富士常葉大研修(集落マップづくり・やまぼうし宿泊)



7・25	7・15	7・6	6・25	6・11	5・4 5	3・30	3・28	3・20 30	2・19 21	2・13 11	2・5	1・23 22	11・21	11・14 31	10・30 30	9・17	
<ul style="list-style-type: none"> ・シャッターアート制作のための視察へ（浅草・川越） 	<ul style="list-style-type: none"> ・フレンドシップ木沢ブログ開設（ヤフーブログ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・二子山山頂広場整備（同9日、14日、21日完成） 	<ul style="list-style-type: none"> ・団結式（シャッターアート成功に向け開催やまぼうし） 	<ul style="list-style-type: none"> ・にな二ナ草餅つき交流（にな二ナ交流施設） 	<ul style="list-style-type: none"> ・第三回山菜ふれ愛ツアー 	<ul style="list-style-type: none"> ・第三回名誉村民授与交流会ーPr1開催（よろみ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・第三回名誉村民授与交流会ーPr2開催（よろみ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナムホーチミン市工科大学長岡技術科学大学入学直前研修（やまぼうし宿泊） 	<ul style="list-style-type: none"> ・中越学生研究会「わかば会」ウィターセミナー（やまぼうし宿泊） 	<ul style="list-style-type: none"> ・越後雪かき道場（やまぼうし他） 	<ul style="list-style-type: none"> ・復興基金デザイン策定発表会（策定終了団体・小千谷市楽習館） 	<ul style="list-style-type: none"> ・西宮交流（神戸、西宮へ） ・横浜防災フェア参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・二子山遊歩道の整備（階段の整備とチップ敷き） 	<ul style="list-style-type: none"> ・木沢よりあいっこ（やまぼうし） 	<ul style="list-style-type: none"> ・木沢流防災体験塾開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟大学「新大祭」参加（二回目・新潟市） 	

4・1	3・9	2・9 10	1・20	12・9	12・8	12・2	11・11	10・20 30	9・29	9・14	8・27	8・25	8・18 19	8・17 11	5・20 19	4・1	
<ul style="list-style-type: none"> ・インターン「高橋要くん」一年間の活動をスタート 	<ul style="list-style-type: none"> ・第五回名誉村民授与交流会（よろみ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・越後雪かき道場（やまぼうし他） 	<ul style="list-style-type: none"> ・餅つきで参加（アオーレ長岡） 	<ul style="list-style-type: none"> ・オール川口フェスタへ 	<ul style="list-style-type: none"> ・モニターツアー（子ども向け体験プログラム）の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・視察研修（柏崎市高柳町門出地区「門出かやぶきの里」、高志の生紙工房「紙すき体験」） 	<ul style="list-style-type: none"> ・第八回集落夢づくり交流会参加（川口公民館） 	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟大学「新大祭」参加（四回目・新潟市） 	<ul style="list-style-type: none"> ・木沢よりあいっこ（やまぼうし） 	<ul style="list-style-type: none"> ・二子山山頂展望台の整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・中越学生研究会「わかば会」サマーセミナー（やまぼうし） 	<ul style="list-style-type: none"> ・第五回二十村郷盆踊り開催（木沢・やまぼうし） 	<ul style="list-style-type: none"> ・富士常葉大研修（やまぼうし宿泊） 	<ul style="list-style-type: none"> ・シャッターアート制作（木沢の四季・春と冬） 	<ul style="list-style-type: none"> ・第四回山菜ふれ愛ツアー 	<ul style="list-style-type: none"> ・アオーレ長岡オープン記念餅つき参加 	

4・6	4・7	4・10	5・5 5・6	5・11 5・12	6・27	6・30	8・4 8・7	8・9 8・11	8・31	9・6 9・12	9・29	10・19	11・3	
・アオーレ長岡オープン 一周年誕生祭餅つき参加	・川口サテライト支援活動報告会参加 (杜のかたらい)	・川口サテライトの支援員を 送る会開催(やまぼうし)	・森林浴広場への道路及び 山頂広場の草刈など	・第五回山菜ふれ愛ツアー	・第一回やまぼうしお茶会開催(以降二回開催)	・森林浴広場の草刈り	・シャッターアート制作最終年度 (木沢の四季・秋)	・富士常葉大研修 (やまぼうし宿泊)	・森林浴広場の草刈 長いベンチの設置 など	・第六回二十村郷 盆踊り開催 (小千谷市塩谷集落)	・短期インターン 二名受入 (中澤志穂さん、 黒田美穂さん)	・木沢・荒谷連携ツアー開催	・新潟大学「新大祭」参加 (五回目・新潟市)	・木沢流!やまあそび楽校 (二子山・やまぼうし)
														

8・30	8・9 8・11	7・9	6・22 6・5	5・29	3・29	3・22	2・10 2・11	2・9	12・21	11・30	11・11
・第七回二十村郷 盆踊り開催(荒谷集落)	・常葉大研修 (復興記念誌ヒヤリング 支援・やまぼうし)	・常葉大研修 (復興記念誌ヒヤリング 支援・やまぼうし)	・森林浴の広場 (草刈・ベント防腐剤塗りなど)	・第六回山菜ふれ愛ツアー	・インターン「高橋要くん」 京都へ旅立ち	・インターン 「高橋要くん」の旅立ちを祝う会(よろみ)	・越後川口雪かき道場 (アオーレ長岡)	・第二回アオーレ川口 フェスタ餅つき参加 (アオーレ長岡)	・視察研修 (十日町市池谷集落・ 枯木又集落)	・関西大学草郷先生と宮本匠さんによる生活変容調査(アンケート) 報告会(やまぼうし)	・木沢よりあいっこ(やまぼうし)
											

あとがき



フレンドシップ木沢会長

星野総一郎

初めに、「轍」発刊に当たり、尽力された方々に感謝します。

平成二十年に「前へ」が刊行されたのですが、震災後節目の十年という事で、制作することになりました。

その間、大規模な自然災害が各地で発生しています。予測を超えた雨量、風速が原因の災害が目立っています。

最近、気になるのが、「自分の命は自分で守るように」という意味合いの警報が発令される事です。それだけ災害が甚大化していると言うことでしょうか。

「轍」刊行を機に、「心構え」のようなものを考えてはどうでしょうか。格言を信じれば「忘れなければやってこない」です。また、地区の行事や地区の活性化の活動など、楽しかった日、充実した日を思い返してもらえれば幸いです。



震災復興記念誌制作部会長

星野正良

中越地震から三年後、震災記録集「前へ」を発刊し、この度十年目の節目としてその後の復興の歩みを伝えていきたいと震災復興記念誌「轍」の作成作業を進めてまいり、ここに発刊の運びとなりました。

記念誌作成にあたり、木沢・峠地区の皆様の暖かい御理解をいただき、なれない原稿書きや家族写真等にご協力をいただきました。今日まで支援をいただいた多くの皆様方にも、励ましのメッセージをお寄せいただき、掲載をさせていただきました。作成作業の過程では、常葉大学の皆様や川口サテライト関係各位様に御指導御協力を賜り、感謝申し上げます。元気な集落を……ふるさとを守っていききたい。そんな想いで歩んできた軌跡をふりかえり感謝し、忘れることなく後世に語りつがれるものと思っています。

この記念誌は多くの皆様の御協力で作ることが出来ました。作成部会一同感謝申し上げます。ありがとうございました。

－ 協 力 －

常葉大学

長岡地域復興支援センター川口サテライト

宮本 匠（京都大学防災研究所特定研究員）

－ 企画・編集 －

フレンドシップ木沢 震災復興記念誌制作部会

部 会 長：星野正良

副部会長：間野光晴

小林正利

星野伸一

星野総一郎

星野隆一

星野 靖

轍

－わだち－

未来へ繋ぐ木沢の軌跡

中越大震災から10年／長岡市川口木沢・峠地区震災復興記念誌

2014年10月発行

発 行

フレンドシップ木沢

代表 星野総一郎

〒949-7502 新潟県長岡市川口木沢467番地1

TEL. 0258-89-2455 <http://echigo-kizawa.com/>

印 刷

有限会社 めぐみ工房

〒940-0032 新潟県長岡市干場1-2-17

TEL. 0258-32-7427

